

385

219

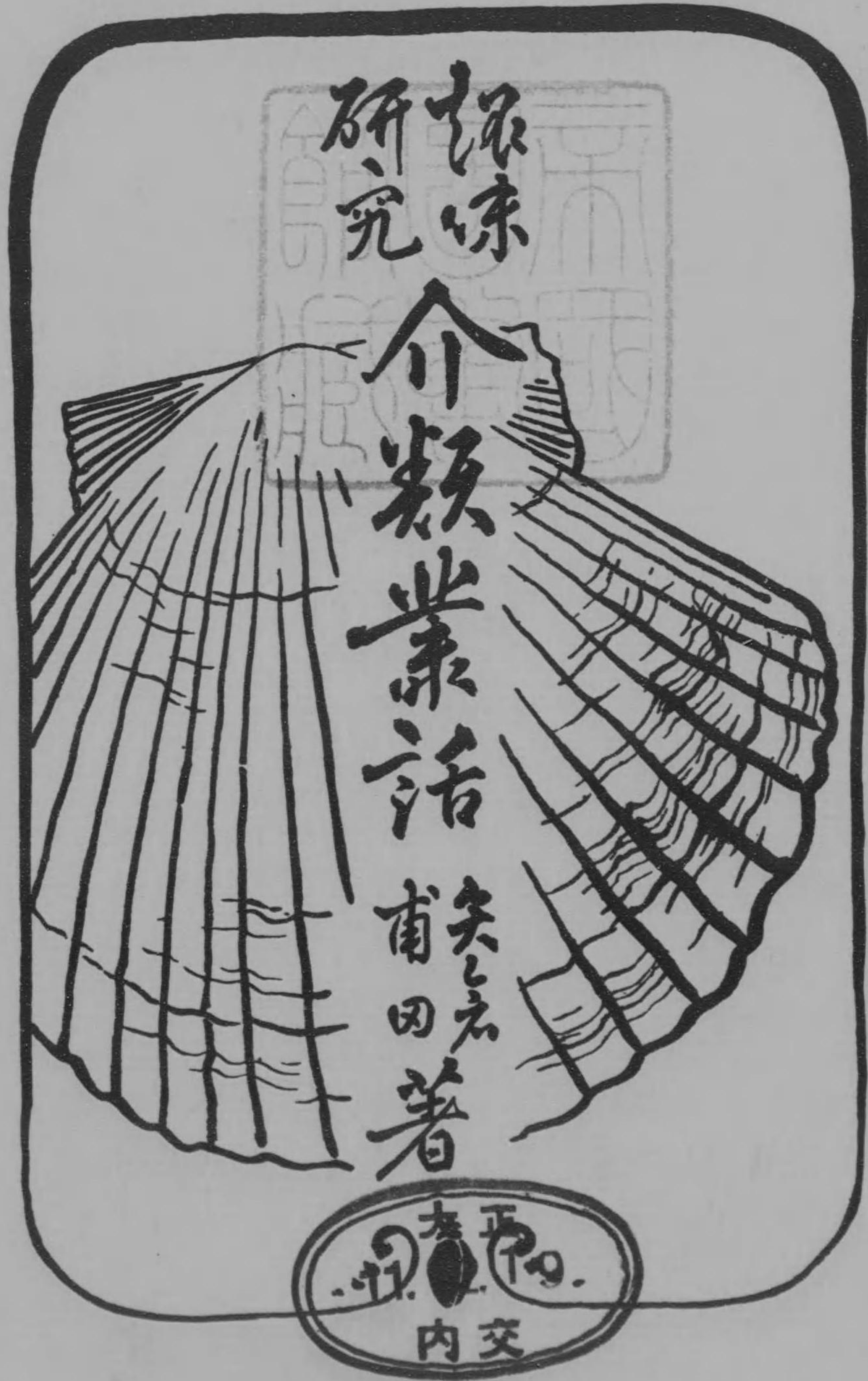
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



ト27M-16

385-219



序に代へて

元來人生の事、たとへ其事が善にまれ、惡にまれ、自分が心血を注いで、刻苦精勵するところに、自ら桂冠が授けらるるもので、其境涯や眞に、人の窺ひ知ることを許されない新天地であつて、殊に創造開拓の事業に於てをやと云ひたいのである、そしてその百折不撓の道程こそ、實に人の目に馬鹿らしくも、また我身に困難なものであるのである。

また爰に最初は左のみ興味を持たない事業でも、否な寧しろ多少の壓迫をさへ感じながらも、ある運命の下に餘義なく従事させられつゝある内には日と共に、云ひ知れぬ一種の味が生れて後には嘗て思ひ到らなかつた程の趣味を感じる様になり遂には其人に取り二つなきものとなり得ることは、常に見聞させらるゝことである。

大凡そ人生には、事業と云はず、教育と云はず將た又趣味にしても、我田引水の

臭のないのは殆んどないと自分は思ふ、そこで人各々其最も深く自ら處するところ、これこそ人類生活の根本だと思ひ、且つ力言するのを屢々見受けるのである、是は尤もなことで世界の中心は常に自己であるからである、要するに何もかも有用で、不必要なものは殆んど無いのであるが、然し或る一物一事だけが殊更に主幹で、他は枝葉に過ぎぬと云ふことは出来ない、皆が相關して同等に價值あるものであると思ふ。其輕重は時代の要求と各個人の必要とによつてのみ定まるもので、一を以て律することは出来るものではない。然しその人間の我田引水なところ、それは實に面白いもので、美はしい人生は此の如きもので織りなされて居るのであるが故に何人に向つても敬意を拂はなくてはならぬと思ふのである。

そこで貝類蒐集及び研究のこと、これは經濟的の方面から見れば至つてつまらないものゝ様である、また現今の生物學者からしても甚しく疎んせられてをるの觀があるが、然しまた我田引水の法則から云はしむれば、これも亦實に大切なる人生の

大事業であるのである、それは教育に、將た産業に。

凡そ今日我々と生を同ふする生物界の現状を論ずるに當り何によつて以つて其の發達進化の跡をたづね得るか、他なし生物化石を外にして、何にか求むべき、而かも其化石中其量の潤澤に於て他に比類を見ざる、其保存の遺憾なきに於て他の追従を許さざるもの貝類化石の上に出ずるものはない、斯くして現生貝類の研究は古生貝類の研究の進むを待つて完ふせらるゝのである、引いては地球年代の研究に資するの價值豈尠少でないのである。よし右に述ぶるが如き遠大の理由なしとするも地球上今、我等と共存する生物の一物をも漏らさざる底の戸に調査を行ひ、生活状態を考察するは、實に我等文明國民の努めにして又特權ではないであらうか。

のみならず貝類は食料として、又貝卸及び美術品の原料として等所謂産業問題として扱ては又美麗なる天然の容姿は愛賞翫弄の絶好品として、我等人生に取りて、實に一勢力を持つものであるが故に我等同人、世の嘲笑的賞讚の間に立つて、猶飽

かず貝拾ひを止め得ないので、是れが捨て難い一種の因縁とも言ひ得やうか。

舞子介類館の出発点と経歴は前に述べた様な偉人的大勇猛心に依るものか將た自然的愛惜心の發達によるものか或はまた何等か他の主因を有するものか自分には之を言ふことは出来ない、兎に角貝類愛護宣傳の爲め世の風波と苦戦しつゝ、幾星霜、今や創立第十五周年を迎へた其功績は顯著であると思ふ而して其祝意を表する爲にあつて記念出版物をものせらるゝそうで、私に序文か跋文の何れかを草せよと切な勸であるが、自分は其文材はないので再三再四断つたのであるが強いて何か書いて呉れとの事である、故に日頃の感じをそのまま書き綴つて其責を塞さうと思ふのである、素より序文でも何でも無い單なる感想に過ぎぬ。

大正十一年平穩な後の厄日

貝の僕生 黒田徳米

自序

貝類の採集！研究！！それは私の趣味である何事にまれ飽きつぽかつた私が之に對しては非常な趣味を覺て甚だ烏許ましいが之を専門に究めることは私の運命であるかの様に考へられてならない。

貝類を採集してゐると宇宙の大自然に接觸してゐるのが私ばかりの様な氣がして總ての煩惱を忘れ心氣自ら廣濶にならざるを得ぬ。數々標本を得る毎に造化の巧妙なことに感服してあらゆる苦痛を忘れ意氣自ら揚つて爾後の活動を思はずにはゐられない。

斯様な次第で繰返し十年間終に今年に及んだ今年は私の邸宅を介類館として世人に公開してから十五年になるから私としても聊か興起せざるを得ない即ち開館十五年を記念し大に祝意を表する爲本書を世に公にする勇氣を出した之に依つて介類の研究之に對する趣味が多少とも普及することが出来たならば私としては幸福だと思

ふ又其點を此本の價值としたい。

本書は新聞に雜誌に發表した私の研究若くは雜話を輯録し兼て新研究に成つたものを加へた随つて書中口語文語と混合はしてゐるが目を瞑つて其儘にして置く素より拙撰なるを免かれないが幸に識者の示教によつて版を重ねて面目を改めることが出来たならば私としては此上もない幸甚である。

本書は唯一に私の趣味より發する研究其物を叢話として上梓したのに過ぎぬが併し之の刊行に當つては非常に後援を與へられた 前知事服部一三閣下 岡崎忠雄氏 福原八郎氏 辰馬悅藏氏 田村市郎氏 本山彦一氏 花岡敏隆氏其他多大の援助を與へられた方が多數である私は其の厚情を感謝し併せて先輩各位に敬意を表しつゝ此の稿を草した次第である。

大正十一年學制頒布五十年記念を迎へて

甫田生 矢 倉 和 三 郎

趣味 介類叢話目次

第一群 總 括 論

日本貝類研究の發達	一
日本産貝類の分布	八
貝類の發育	一五
貝類各部の名稱	二三
貝類學用語一般	三三
貝類學命名者略語彙	四〇

第二群 研究資料 (一)

洪積層中の貝類に就て	四八
かたつむり	五七
寶貝及び貝貨に就て	七一

いたばがき……………八一

さりがひ……………九二

貝塚の貝と貝製作品に就て……………九六

たごごいか……………一一五

巻貝と二枚貝……………一二五

第三群 研究資料 (二)

日本産蛤貝のフォームに就て……………一三七

ウスユキミノの飛躍……………一四二

イタヤガヒの飛躍……………一四四

長者貝と長絲掛……………一四五

貝の特殊なる習性……………一五三

日本産左巻の貝類……………一六一

日本の名を負へる貝類……………一六三

日本産蜆の新研究……………一七三

貝製勾玉の研究……………一九二

セタシマミの研究……………一九六

圖版及び特殊の貝類解説……………二〇八

第四群 研究資料 (三)

日本の辨總類……………二一六

一 原 總 目……………二一七

二 絲 總 目……………二一九

三 正 辨 總 目……………二三二

四 隔 總 目……………二八二

第五群 貝類と人生

總 說……………二八五

神宮と鮑熨斗……………二八七

鮑熨斗、折熨斗、海茸熨斗……………二八七

蛤と貝覆の遊戯	三〇四
貝類の蒐集	三〇九
伊太列式彫刻	同
貝 釦	三一五
切貝と摺貝	三一七
貝 粉	三二〇
胡 粉	同
貝 灰	三二一
眞 珠	三二三
天然眞珠(あ、やがひ眞珠、あはび眞珠、蝶貝眞珠、貽貝眞珠、淡水産眞珠)	
人工養殖眞珠(支那養殖眞珠、日本養殖眞珠、一、貝附眞珠、二、まへ養殖)	
黒蝶貝養殖、三眞圓養殖	
人造眞珠(硝子眞珠、不二眞珠、美久仁眞珠)	
貝の應用	三四八
貝の圖案、紋所、謡曲、俗謡	
貝に関する傳説と迷信	三五〇

不食貝、袖貝、土俗、越後人貝、貝中化生七佛、迷信の貝	
ガストマと貝類	三五五
日本住血吸虫、肝臟ガストマ、肺臟ガストマ、横川氏吸虫	
食用貝の分類	三五九

第六群 採集指針

貝類の採集と標本の保存法	三六二
採集用具、貝類の採集、理想的の標本、幼貝と老貝、標本の處理、 標本としての手入れ、標本の保存、包装に就て	

第七群 切抜帳より

明石見物	三八二
奇しき片山病	三八三
病源は日本住血吸虫、中間宿主は陸産の貝	

楽しみ浦の眺よな	三三八
スタール博士山陽行脚	三九〇
貝類學と貝塚の貝	三九二
貝類の分布、貝類學の趣味、貝塚の貝と新種、貝塚は海岸より離れて居る、善く發育して居る貝塚の貝、ニホンシヅミの本種	三九七
明石蠣と廣島蠣	四〇一
貝類の蒐集に前後十五年間	四〇一
附 録	
開館十五年史	
参考書名一般	

圖 版 目 次

貝類各部の名稱	
第一版 貝殻各部の稱呼	三二—三
洪積層中の貝類	
第二版 むかしちひろ	五六—七
かたつむり	
第三版	七〇—一
一、あはくろいはまいまい、	二、同上齒舌、
三、同上刺針、	四、ひだりまきまいまい、
寶貝と貝貨	
第四版	八〇—一
一、支那發掘貝貨—骨貨—銅貝貨、	二、寶貝、
三、ヤツプ島貝貨、	
たいぼがき	
第五版 いたぼがき	九〇—一

さりがひ

第六版……………寫真銅版……………九二―三

一、尼崎の鳥貝、二、さりがひ、

貝塚の貝類

第七版……………同……………一四―五

一、但馬城崎郡新田村中谷貝塚の貝層一部、

二、貝塚のハヒガヒ現生種、

たこざいか

第八版……………寫真銅版……………一八―九

一、たこぶね、二、あふひがひ、

長者貝と長糸掛

第九版 おきなねびす……………原色版……………一四八―九

第十版 ながいさかけ……………コロタイプ……………一五二―三

貝の特殊なる習性

第十一版 ……コロタイプ……………一六〇―一

A、りんぼうがひ、 B、貝に棲む貝、

日本産蛸の新研究

第十二版……………コロタイプ……………一九〇―一

一、にほんしどみ、二、さざしどみ、

三、ひめにほんしどみ、

第十三版……………同……………同

四、やまさしどみ、五、せたしどみ、

六、さつましどみ、七、むらさきしどみ、

第十四版……………同……………同

八、ましどみ、九、なりひらしどみ、

第十五版……………同……………同

一〇、あはちしどみ、一一、かれつけしどみ、一二、たいわんしどみ、

第十六版 おほしどみ……………同……………同

貝製勾玉の研究

第十七版……………同……………一九四―五

貝の勾玉(石鋸)

セタシバミの研究

第十八版 せたしどみの型……………コロタイプ……………二〇二—三

第十九版 貝塚の蜆……………同……………同

圖版及び特殊の貝類解説

第二十版……………同……………二〇八—九

第二十一版……………同……………二一〇—一

A、いなごはくがひ、 B、みぢんつゝがひ、

C、さうきやうりつそつば、 D、ひだりまきこまがひ、

第二十二版……………同……………二二—三

A、いそまいまい、 B、くちきれうきがひ、 C、うきつのがひ、

日本の辭總類

第二十三版……………亞鉛凸版……………二二六—七

一、なみまかしは、 二、なみまかしはもごき、

三、まごがひ蝶紋、 四、うみきく蝶紋、

五、おほはれがひ、 六、いぞしらながひ、

七、もしほがひ、 八、さんこくひ、

第二十四版……………亞鉛凸版……………二六八—九

一、つきがひもごき、 二、かこがひ、

三、ごぶしどみもごき、 四、へのじがひ、

五、につくわうがひ、 六、あらぬのめ、

七、いぞいしかけがひ、 八、ひさへぎく、

第二十五版 しれなしどみ……………コロタイプ……………二四二—三

第二十六版……………亞鉛凸版……………二七八—九

一、いそしどみ、 二、おほみぞがひ、

三、おほまて、 四、きぬまさひがひ、

五、つくねがひ、 六、かもめがひ、

七、うすぎぬ蝶紋、 八、うすかたびら、

貝類と人生

第二十七版 賢所及神宮神饌鬘斗……………石版色刷……………二九六—七

第二十八版 折鬘斗……………同……………三〇〇—一

第二十九版 伊太利式彫刻……………原色版……………三一—三

貝の色層と文鎮

第三十版	寫真銅版	三二八—九
一、あこやがひ眞珠断面、	二、眞圓養殖眞珠の断面、	
第三十一版	コロタイプ	三四二—三
一、眞圓養殖眞珠(貝核)	二、同 上(鉛核)	
三、貝附養殖眞珠(核と膜)	四、支那養殖眞珠(核と膜)	
第三十二版	貝中化生七佛	三五二—三
第三十三版	寫真銅版	三五八—九
一、日本住血吸虫の雌雄、	二、同上幼虫、	
三、かたやまがひ(みやいりがひ)		

挿圖目次

貝類の發育	
まるごぶしゞみ	亞鉛凸版
たや幼體	同
日本産蛤のフォーム	同
はまぐり	同
圖版及特殊の貝類	
いそこはくがひ	同
貝類と人生	
貝覆の仕方	同
摺 貝	木版
眞珠貝の層	亞鉛凸版

表紙意匠 安留鯛之助氏

補記

近來折熨斗に、茶色の洋紙に皺を寄せ、熨斗に擬へたものが出来て居る。
(圖版五ノロは即ちそれ)

趣味研究 介類叢話

矢倉和三郎著

第一群 總括論

日本貝類研究の發達

有史以前から我國に貝類の饒産した事は、各地に多く存在せる石器時代の遺蹟、貝塚に包含せる貝類の豊富なるによつて證明せられ。降つて 神武天皇が長髓彦を誅せんとし給ひし時の御製に、

加牟加是能 伊勢能宇美能 意斐志爾 波比母登富呂布 志多陀美能 伊波比

母登富理 宇知互志夜麻牟

右譯 神風の 伊勢の海の 大石に 蔓延はひもこほろ纏まとふ 細螺しただみの い這もこほひ廻り 撃ちてしまむ

註 大石は地名、細螺はスガヒ、イシダ、ミ、ガンガラの類の總稱。

垂仁天皇二十六年(六五七)皇女倭姫命を伊勢に遣し給ひし時、志摩國崎島附近に於て蜃婦が魚介を捕て姫に献上せし由古書に見ゆ、景行天皇五十三年(七八三)帝安房浮島行宮に幸し給ひし時、磐鹿六鴈命より五尺白蛤を獻せし古事に因みて後世一婦徳一祝事一の表徴として蛤を結附くる様になつた。藤原期の末、貝覆かひおほひなる遊戯は盛に弄ばれ、聽て貝類を蒐集する事を嗜好する様になつた。徳川期に入り珍貝の蒐集を互に誇り稍研究的に進む事になつた。元祿三年版六々貝合せ和歌は著書中古きもの一つである、降て寛延四年大江流芳著す所貝盡浦の錦二冊あり、慶安四年兼葭堂の渚の玉一名奇貝圖譜あり、文化、文政の頃比一層玩具の趣味は隆盛となり、錦の浦裏、五百介圖、六百介品、渚の錦等の著書あり、天保に入り武藏石壽の甲介群

分品彙二冊あり同十四年同人著目八譜は寫本極彩色十五卷の大部なもので本邦著書中の浩瀚なるものである、又畔田翠山の介志十卷、怡顔齋介品二卷等は有名である。貝原益軒大和本草綱目、小野蘭山本草綱目啓蒙に貝類の部あり、多數の貝類に和名を附し研究も大に進歩的であつた、尤も此の時代の研究は分類に據るに非ず、貝類の外甲殻類、珊瑚をも包含し賞玩を主としたものであつた、從て其容器は殊更趣向を凝し黒漆塗に内金のもの、木地に極彩色を施したるもの或は帖仕立の箱に爲したるもの等全く美術的である、又粗なるものにて桐材、檜材の重ね箱であつた。要するに、天保年前後は貝類研究の全盛期であつて現今採用しつゝある和名の基礎を作つた事は特筆すべく感謝を表する次第である。

明治維新に際し國事多端なりしに相尋いで専ら泰西の文物輸入に憧憬したるが爲我邦在來の古美術品、書籍など全く顧みられず貝類著書の逸散したのも尠くなかつた。而して明治十二年大學御備教師米人エドワード・モールズ博士の大森貝塚の發

見あり、考古學並に博物學の研究は日を追ふて著しく進歩した。特記すべきは外人の早く日本産の貝類に着目し其著書の多くは浩瀚なると、日本海産貝類目錄（明治二十九年）を示されたる等は甚だ耻かき感じがする。實は日本産貝類目錄の我邦で出版されたのが未だ無いのである。又明治三十九年米國水産調査船アルバトロス號は我沿海各所に採集を試み、深海産の貴重なる魚介類標本を多數持ち歸つた。

日本産の貝類に對する外人著書の主なるものを左に掲げる。

DUNKER, Mollusca japonica, II. 1861.

SCHRENCK, Mollusken des Amur-Landes des nord-japanischen Meeres, I. 1867.

LISCHE, Japanische-Meeres Conchylien, III. 1869-74.

KOBELT, Fauna Molluscorum Extramarinorum Japoniae, I. 1880.

STEARNS AND PILSBRY,

Marine Molluscks of Japan, I. 1895.

日本の貝類研究に關しては最初の功勞者として田中芳男氏を賞揚せねばならぬ。次で故飯島魁博士の陸産貝類。岩川友太郎學士の淡水産貝類の研究。故内山柳太郎博士は明治三十三年動物學雜誌第百三十七號より同三十六年に互り二十數回に連載せられたる日本産貝類圖說に貝類六十三種あり。徳永重康氏は明治三十五年動物學雜誌第百六十二、四、八の三號に互り日本産介類圖說帆立貝科二十四種を圖說し。藤田經信氏は動物學雜誌第百四十號に「日本に普通なる辨鰓類の屬名の識別」を記載し。平瀬與一郎氏は明治四十年より同四十二年四月に至る介類雜誌上日本陸産貝類百九十四種、海産貝類二百六十八種を圖說せられ、同四十二年貝類手引草に貝類三百一種を解説し、大正六年日本産筭貝類圖說にタケノコガヒ類七十種を圖說せられた。

岩川理學士編東京帝室博物館所藏の日本産貝類標本目錄第一編は明治三十四年刊行し三百五十八種、第二編は同三十八年刊行し二百九十一種、第三編は同四十二年

刊行し七百三十一種を登載し、大正八年改版の目録には總計千九百三十種を掲載せられ、大正六年動物學雜誌第三百十一號より三百三十一號に互り連載せられた日本産文蛤目録あり七百三十種の名を掲げ。大正三年刊行の滋賀縣水産試験場の琵琶湖水産調査報告第二卷には琵琶湖産貝類二十二種を掲げ。大正五年小生編兵庫縣産貝類目録には兵庫縣産の貝類七百三十種の名を掲げ。大正十年三重縣刊行名勝舊蹟天然紀念物調査報告中に金丸但馬氏の三重縣産貝類三百七十二種を掲載せられ。歐米及び濠洲、印度の動物學雜誌には數々日本産貝類の研究發表を掲載せらるゝことは感謝に堪へぬ次第である。

大正二年三月平瀬貝類博物館開設せられ、貝類を研究する者は素より一般世人に對し、貝類蒐集の偉大なる努力と其種類の豊富なる事は、驚異の眼を以て見られ、貝類界は頓に活氣を呈し大なる歓迎を受けたことは間違なき事實であつた。然るに大正八年五月或る止を得ざる事情の爲め俄に閉館することとなり、斯界に大なる動

搖を生じ進展しつゝあつた貝類研究界も茲に一頓挫を來たすこととなり、舊來の研究者は多く倦怠の状態に立至り、新進の研究者遅々として一向振はないのは誠に遺憾に堪へぬ次第である。

日本産貝類の分布

全世界に産する貝類の總數は海陸産を通じて約七萬種あると算せられ、其大部分は大平洋及其沿岸各地である。日本産の貝類は陸産千二百、淡水産百、海産二千二百、合計三千五百種で全世界産貝の二十分に一に相當し、面積に比例して甚だ饒多である。且地勢の關係上北は樺太、千島の寒帯より温帯地方を経て南臺灣の熱帯に至る間、海岸線の屈曲多く分布の變化に富める事は多く類例を見ざる所である。

貝類研究の目的は分類を作るに在る、分類は動物體の解剖竝に貝殼の構造に據り産地は必ず正確に調査する事が緊要である。而して大陸と小陸、島と孤島、大湖と池沼、大河と小流、或は寒帯、温帯、熱帯等同温線内に在るとも、周圍の状態特に海流は其分布に大なる影響を與へるものである。夫れ故に分布の研究は貝類學上緊

要であると共に一層の興味深きものである。

日本産貝類の分布は地勢の關係上魚類の分布と略同一であるが、素より確然たる分布區域を制定する事は困難である。主として近海、深海産のものを標準として左の五區に分つことが出来る。

一、千島より樺太、北海道の東海岸を南下して金華山沖に至り、一は樺太の西海岸より南下し津輕海峽を経て前記の線に合すもの。

カムチャツカ半島より千島を経て南下する寒流は樺太より南下する寒流と合して金華山沖に至り東折し、又オホツク海より南下する寒流は北海道西海岸に沿ひ男鹿半島附近に至り、日本海沿岸を北上する暖流と接觸し日本海の環流となつて消滅し、一部は津輕海峽を通過して前記の海流に合する故である。時季によりては茨城縣の境界線迄分布を見る、主なる産貝はチシマバイ、ヒモマキバイ、エゾバイ(千島)、ナガ、キ、ウバガヒ、ホタテガヒ、エゾキンチャク、

シライトマキ、チヰミボラ、(北海道、三陸地方)

二、金華山沖より太平洋沿岸に沿ひ九州の西南端に至るもの。

黒潮の枝流は九州の南端より太平洋沿岸に沿ひ茨城縣の北境より東折する故である、時季により金華山附近に迄分布を見る。此區域には深海産の珍貝並に沿岸産の豊富なること等、研究上須要なる産地が尠くないのである。主なる産貝は相房並に土佐沖の長者貝、紀伊水道のナガイトカケ、(以上珍品)アハビ、サバエ、ホネガヒ、アクキガヒ、リンボウガヒ、寶貝及芋貝類の一部、タコブネハマグリ、アサリ、アコヤガヒ、カキ、トリガヒ等である。

三、男鹿半島より日本海沿岸に沿ひ九州の西北端に至るもの。

琉球より北上する暖流は九州の西北端より對島水道を経て日本海沿岸を北上して日本海環流となるものである。主なる産貝は九州西海岸と同一の小貝類を能登半島以西の沿岸に産し、エゾボラモドキ、エツチウバイ、ウバトリガヒ、ベ

ンケイガヒ等は日本海特殊のものである。

四、臺灣より琉球を経て九州の南部を通じて小笠原島に至り。一は九州の西北端に至るもの。

熱帯地方より北上する暖流は臺灣東海岸を通過して琉球を経て東折し、所謂黒潮となつて小笠原島を東行するものと。琉球より北上して九州の西海岸を洗ひ朝鮮に達するものがあるからである。此區域には南洋系統に屬するもの多く貝類の豊富なると美貝の多いのとは此區域の特長である、主なる産貝は概して大形なるものが多い、寶貝科、芋貝科、袖貝科、法螺貝科、夜光貝科、更紗馬蹄科、瑋渠科等である。

五、臺灣全島及び西海岸には全く本土と異なる特殊の貝を産する。

熱帯地方より北上する暖流は臺灣の西海岸を通過し、渤海灣より南下する寒流と相接觸するからである。主なる産貝はハルカゼ、シロテフガヒ、(澎湖島)夜

光貝、タイワンバイ、マドガヒ、タカサゴツキヒ(西南部)等である。

陸産貝類の分布は千島及樺太、小笠原諸島、琉球諸島、臺灣等には特殊のものを産し、北海道、本土、四國、九州等には系統的に廣く分布し、又其一地方を限りて産するものもある。左巻の蝸牛は分布區域明瞭であつて、普通ヒダリマキマイマイは東京附近を中心とし、タカヤマヒダリマキマイマイは伊豆、相模を中心とし何れも西は鈴鹿山脈を限られ、東は陸奥を限りて分布し、東北地方にはオホタキマイマイ、カザリマイマイあり、近畿、中國、四國、九州には絶對左巻蝸牛を産せず、琉球久米島以西に再び出現してリウキウヒダリマキマイマイ、クロイハヒダリマキマイマイの二種を産し、臺灣南部にはバンカラマイマイ、ヒダリマキクリマイマイ、サカマキマイマイ等を産する。

陸産貝類中チシマコハクガヒは世界最小の貝であり、(殻の徑一ミメ)ウルツブマイマイ、カラフトマイマイは大陸的である。カタマイマイ、エンザガヒは小笠原島

特殊のものであり、臺灣のナガマイマイ、チクヨレガヒ、與那國島のラツバガヒは珍奇なる形を爲し、飛驒のクロイハマイマイ、(殻の徑六五ミメ)阿波のアハクロイハマイマイ(殻の徑六三ミメ)は共に邦産中の最大種である。ヒトスヂマイマイ、ミスヂマイマイ、ヒタチマイマイ、ハークロマイマイ、クチベニマイマイ、セトウチマイマイ等は最も廣く分布して居る。

キセルガヒは全部紡錘狀の左巻である。北海道に三種、小笠原島に一種を産する外、全國至る所に最も廣く分布し、琉球諸島に著しく分布せる種類もある、大小二百三十種を産し本邦陸産貝類中の大群である、マルテンオホキセルは高一寸五分、キセルガヒ屬中世界的最大種である。

本邦の淡水産貝類は其種類尠く分布の變化に乏しい。北海道の特産で東北地方の一部に分布するカハシンジュガヒ。東北地方のカクタニシ。霞ヶ浦のカラスガヒ。諏訪湖のオグラシヅミ。琵琶湖のメンカラスガヒ、セタシヅミ、ナガタニシ。臺灣各

地のタイワンシヅミ、淡水川のオホシ、ミは著しきものである。

貝類の發育

卵生である、雌雄異體にして産卵後一定の期間を経て一個の卵子中に一個の幼體を包含する章魚、烏賊の類と、一個の卵囊中に數個乃至數十個の幼殼を包含するテングニシ、バイ、バウシウボラの類とがある、又カキの如く海水中に放卵して受精を爲すものもある。蝸牛の類は雌雄同體であるが異體と交接して産卵し、田螺、川蜷、キセル貝の類は母體內で受精し幼殼と成つて排出せらるゝのである、後者を胎生と云ふ。ドブシヅミ、イタボカキの類も之れに屬する。

幼殼は胎殼と稱し貝殼構成の基礎であるが故に研究上貴重なるものである。特にヒタチオビ、ホネガヒ、ナガニシ、エゾボラモドキ等の類は胎殼の形狀により分類の標準を爲す場合が多い。

貝殻は内臓を保護する外、保護色を有し或程度までは能く外敵の襲來を防禦する事が出来る。外套膜は常に貝殻を構成すべき物質を分泌し、或期間先つ外表皮を分泌し、次に稜柱層を分泌し更に眞珠層を分泌して貝殻を増大し、發育を掌るものである、螺類の螺脈、雙殻類の生長腺即ち渦脈は生長の痕蹟である、完全に發育したる後は只貝殻の厚さを増すのみである。

貝類は動植物と等しく發育力の旺盛なるものと否とにより、貝殻の大小に著しき等差を生ずるが故に單に貝殻の大小のみによりては老幼を斷定する事は不可能である又幼貝と老成したる貝と甚だしき變化を生ずるものもあるから研究を要する。

貝殻が或る事故の爲に欠損したる時、多くは貝殻發育の中途、殻口部を傷く場合には多套膜は分泌力を忽ち欠損部に集中して貝殻を補修し原形に復するのである、間々誤れる方向に屈折して補修する事があり、一時外套膜損傷の爲めに分泌力に影響して不正に補修を爲す事もある、斯かる場合貝殻は畸形を呈する事となる。

貝類の發育を研究するには胎殻の發生より順序的に貝殻の發育を考查する事が必要であるが、多くの場合理想的の標本を得る事は困難であるから普通幼殻の完全なるものを得て満足するより外致方無からうと思ふのである。幼殻は生長腺、色彩、形狀等鮮明であり、貝の特長を完全に具備して居るから幼殻と老成したるものとの比較考查により稍理想に近い鑑識を下す事が出来る。幼殻と對照せずして貝類の鑑定を爲す事は危険であると謂はねばならぬ。此の如く幼殻は研究上必要ではあるが左りて幼殻を多く取り盡す事は種族保存上罪惡である事も考慮せねばなるまい。

近來貝類を濫獲……即ち幼貝を多く捕獲するが爲め著名の産貝を著しく減退したのは甚だ遺憾に堪へない次第である。北海道のナガ、キ、房州方面のタコブネ、アホヒガヒ、琉球方面のタカセガヒ(サラサバタイ)、ヒロセガヒ(ギンタカハマ)、ヤクワウガヒ等は夫れである。併し又漁獲に制限を附し或は禁漁期間を設くる等の方法により貝類を保護する地方もある、青森灣のホタテガヒは三寸未滿、播磨東部沿

岸及淡路西海岸のイタボカキは一吋二分未満の幼貝を禁漁し、志摩の鮑を冬季禁漁する等である。又貝類養殖事業各地に勃興し追次好果を擧げつゝあるは慶すべきである、千葉縣及廣島縣の牡蠣、九州沿岸のアコヤガヒ天然養殖、備前兒島灣のハヒガヒ、サルボウ、アゲマキの養殖及スミノエガキの移殖、有明灣のアゲマキ、タヒラギ、スミノエガキ、熊本縣のハマグリ養殖等は主なるもので、其他ムラサキガヒ、オキシジミ、オホノガヒ、ウミタケ、カバミガヒ等の養殖場もある。

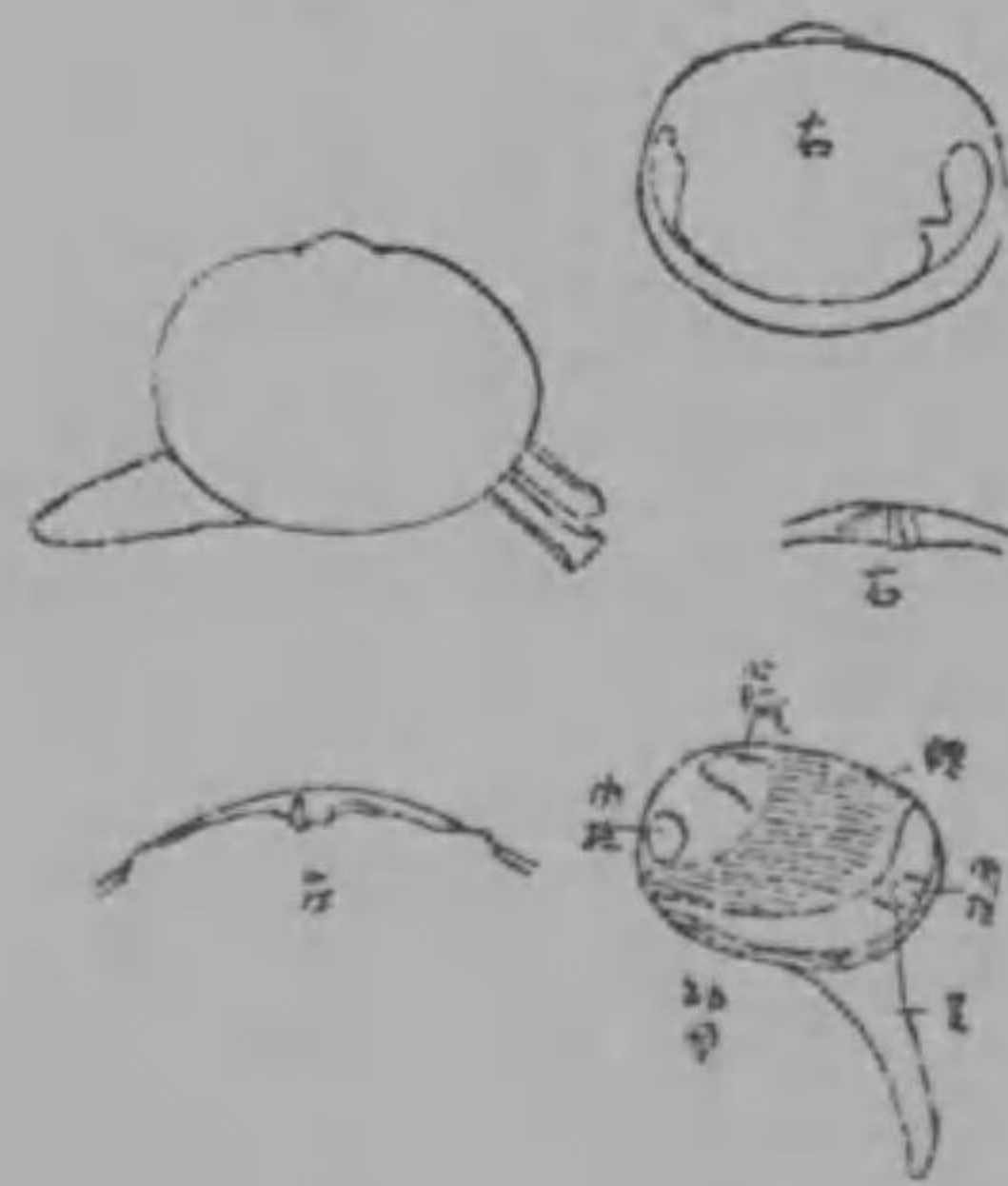
總じて貝殻は外套膜より絶えず分泌せられ發育するものであるが最初の一年は最も早く増大し、次年より夏、冬の二季は分泌力減退するを常とし殊に冬季は殆んど休止の状態に至るものであるから此兩季は貝殻表皮に著しき渦脈を劃する、更に詳しく謂へば翌年の夏の終りに明瞭なる輪線を劃し、秋冬には分泌力衰へ前半季よりも狭き輪線を劃す、以後年々漸次狭き輪線を劃する、此輪線により貝の年齢を測定する事が出来る、併し貝類によりては輪線の不明瞭なるもの、全く不明なるもの

(螺類に多い)もある、眞珠貝は間々肉柱の移動痕によりて又は眞珠の顯微鏡的檢鏡により年齢を推定し得る事もある、此輪線は貝殻に並行して發育するから断面は木理と同状である、蝶貝は此理を應用して幾枚にも薄く截斷する事が出来る、此故に蝶貝を雲母貝とも通稱して居る、イタボカキの年輪は不規則に並行し且年輪層の中心部(殼頂の内面下部)の層間空虚となつて居る事が多い。

□[○]ヤ[○]ル[○]ド[○]ナ[○]シ[○]タ[○]ミ[○] Musculium heterodon Pils. の發育

著者原圖

余は大正九年六月十五日滋賀縣彦根町の小川より多數のマルドブシ^ミを採取したるに時恰も産卵期に際したるを以て、親貝三十個を容器に飼養し、數時間の後(午後一時)檢せしに幼貝五個を産出し、午後六時には三十五個に増加し、更に翌朝檢せしに六十六個に増加したりき。母貝を開殻して檢したるに悉く五個乃至八個の胚貝を藏せるを見たり。幼貝の大きは



もよく知らるゝ所なり。

前二項に於て示したるが如く、幼體と老成したるものとの差、一層顯著なるものがある、袖貝科、寶貝科に屬するものは是れなり。

袖貝屬は老成して體層發達し、其特長を顯はすものである、就中ラクダガヒ、クモガヒ、スイジガヒ等は老成するに伴ひ外唇の突起を完成するものであるから、幼殼と老成のものとは全く別種の感がある、又寶貝の幼殼は殆んど枕貝屬の如くであるが稍發育するに伴ひ、外唇内方に巻曲して殼口の兩側には彫刻即ち齒を生じ、貝殼は次第に重厚となる、特に八丈寶の幼殼は茶褐色に斑紋を有するのみであるが、齒を生じたるものは次第に背面暗黒色を帯び、斑點を生じ全く幼殼とは別種の如くなる。

貝類各部之名稱

螺殼類之部

胎殼 卵から孵化して出來た最初の貝殼、
殼頂 貝殼の尖端即ち胎殼のある頂邊、
螺層 殼頂より螺旋狀に發育せる貝殼の表面、
體層 殼口より一卷の大なる螺層を指す、
次體層 體層より次の一卷を云ふ、
生長腺 胎殼より發育に伴ひ劃する細線である、
縦助 生長腺が太く隆起を爲せるもの、
縦脹脈 螺層が或程度まで發育した時、一端殼口を作り更に螺層を延長する場

合に、此殻口の跡が隆起となる、之れを縦脈と云ふ、

螺状脈(螺助) 縦助と直角に走れる線を螺助と云ふ、

縫合 螺層と次の螺層とが接觸する處である、

肩角 縫合に近い次の螺層に角張りのあるものを肩角と云ふ、

螺塔 殻頂から體層までの螺層を總稱して螺塔と云ふ、

周縁龍骨 螺層の低い貝にある、螺層の周圍に銳角を爲せるを云ふ、

殻軸 螺殼の中心を爲せる軸である、貝殼は一層毎に殻軸を中心として螺旋状に發育するのである、

臍 殻軸中空の末端開孔せる部分を云ふ、

綳帶 臍に隣れる隆起物、

殻口 螺層の末端開口せる部分を云ふ、

外唇 螺層の末邊に接したる殻口の一部、

内唇 殻軸に接したる殻口の一部を云ふ、

水管口 殻口の末端溝状に突出せる部分を云ふ、動物の水管を出す所である、

滑層 内唇又は後溝より螺層へ掛けて被れる乳白色の光澤ある分泌層、

罅裂帶 長者貝又は *Turris* 屬の殻口にある切れ込みが貝殼の發育と共に癒合した痕跡が縫合に並行して帶状を爲せるを云ふ、

唇^{へた} 殻口を閉鎖して動物體を保護する爲の蓋である、石灰質(夜光貝屬、玉貝屬等)角質(法螺貝屬、骨貝屬等)膠質(ツメタガヒ屬、キサゴ屬等)の三種類がある、

核 唇の圈状中心點、

外套膜 動物體の外周を掩へる膜、

足 匍匐する局部、

吻 頭部にある突起物、先端に口がある、

觸角 匍匐する際に感覺する爲めの細き突起物、

齒舌 口内にある齒と舌とを兼ねた、鏟狀の咀嚼用物質、

殻軸筋 體の脱出を防ぐ爲め、殻口の内方殻軸部の下端に附着せる筋肉、

雙殻類之部

殻頂 螺類の殻頂に相當し、貝殻の尖端である、

靱帶 左右雙殻を聯結する膠狀物質である、雙殻を開く作用を作し、普通殻頂の後方にある、靱帶が殻外に突出せるを外帶と云ひ、内部にあるのを内靱と云ふ。

軟骨 ウミギク、ホタテガヒ等にある、三角粒狀の膠質靱帶様物質、

左殻及右殻 殻頂を上とし、靱帶は後方なるが故に一方は左殻一方は右殻となる、内靱で左右の方向不明の貝は、肉柱は稍後方に偏在するものであるから左右殻を判別することが出来る、

背縁及腹縁 殻頂の前後上半を背縁とし、反對の下半を腹縁と云ふ、

前後兩端 背縁と腹縁との接觸する前後兩突起部を云ふ、

前丘及後丘 殻頂の直前にある窪所を前丘と云ひ、後方にあるものは後丘と云ふ、

外殻 左右兩殻の全表面を云ふ、

放射線 殻頂から腹縁に向ふて放射せる線、

放射隆起又は放射助 同上の隆起せるもの、

渦脈又は生長腺 貝殻の發育に伴ひ劃する細線又は隆起、

壟、鈍角隆起 貝殻の表面にある角張りたる隆起を云ふ、

左右相稱 左右殻共同大に形揃ひたるを云ふ、又巻貝でも左右同形のものに云ふ、

開く 雙殻密着せず間隙有るもの、前後の合はぬものは前後に開くと云ふ、

切らる 前後端が切りたるが如く、角張れる形を云ふのである、此場合には前後に切らると云ふ、

層

貝殻を構成する層の總稱

外皮又は表皮層 貝殻の上層、

稜柱層 外層の下にある稜柱狀の層、

眞珠層 貝殻の内面、外套膜に接したる層、稜柱層の下層である、眞珠光澤即

閃光あると否とは問はず、眞珠層と云ふ、

光輝層又は内層 眞珠貝類に限つてある、眞珠層の内面肉柱部の所にある層。

蝶 鉸 蝶鉸の如なれる、雙殻の接合部、

主 齒 蝶鉸線上に噛み合へる中央の齒、

側 齒 主齒の前後にある長き齒、

齒 丘 主齒の後方、靱帶の附着せる所の平面部を云ふ、

窩心部 貝殻の内面、殻頂下の部分、

觸 唇 動物の前方、口の左右にある突起物、螺類の觸角と同様のもの、

外套膜縁 外套膜の縁邊である即ち腹縁に接したる部分、

外 鰓 外套膜に接したる即ち外側の鰓、

内 鰓 内側即ち足に接した方の鰓、

水 管 體の後方にあつて、呼吸の爲の管、

入水管 鰓に水を吸入する爲の管、

排水管又排泄管 鰓に吸入したる水を排出する管、肛門は排水管内に開口する故

又排泄管とも云ふ、

足 絲 附着生活を爲す貝は、足の一部より纖毛又は筋肉質の足絲と稱するものを分泌して他物に附着するのである、

閉殻筋又肉柱 閉殻筋(肉柱)は靱帶と反し雙殻を閉づる作用を爲す、前後兩端にあるものと、中央(稍後偏)に一個の閉殻筋のみを有するとある、

外套灣入 外套膜痕の後方、後肉柱痕との間に灣入せる痕は水管の附着した所で

ある、灣入の深い程水管が長いことを示すものである、(圖版第一版参照)

頭足類之部

頭 俗にドウピンと稱する部分、

鰭 頭頂より左右に突出せる薄膜、

脚 吸盤を有する八本の脚、

觸脚 烏賊類にのみ有する長き二本の脚、

胴 脚の上部、

口 俗にカラスとトンビのある所、口内には齒舌あり、

貝殻 俗に云ふ甲である、石灰質の堅きものと、薄き半透明のものがある、

噴水管 腹部 頭の下端に突出し、水を噴出する反動により體を後進するのである、

背 甲のある方、

腹 噴水管のある方、

煙管貝之部

閉 殼口内を閉鎖する爲の石灰質半透明、匙状のものであつて、細き柄を

附屬し各種の異りたる形狀を爲し、末端は體層の終れる上部に固着して居る、

薄板 殼軸及び内唇にある薄板状の長き突起物である、

殼軸板 殼軸の末端に旋回せるもの、

主薄板 内唇の上部にあるもの、

内方薄板 主薄板の内方に旋回せるもの、

螺旋薄板 殼口の内方に旋回せるもの、

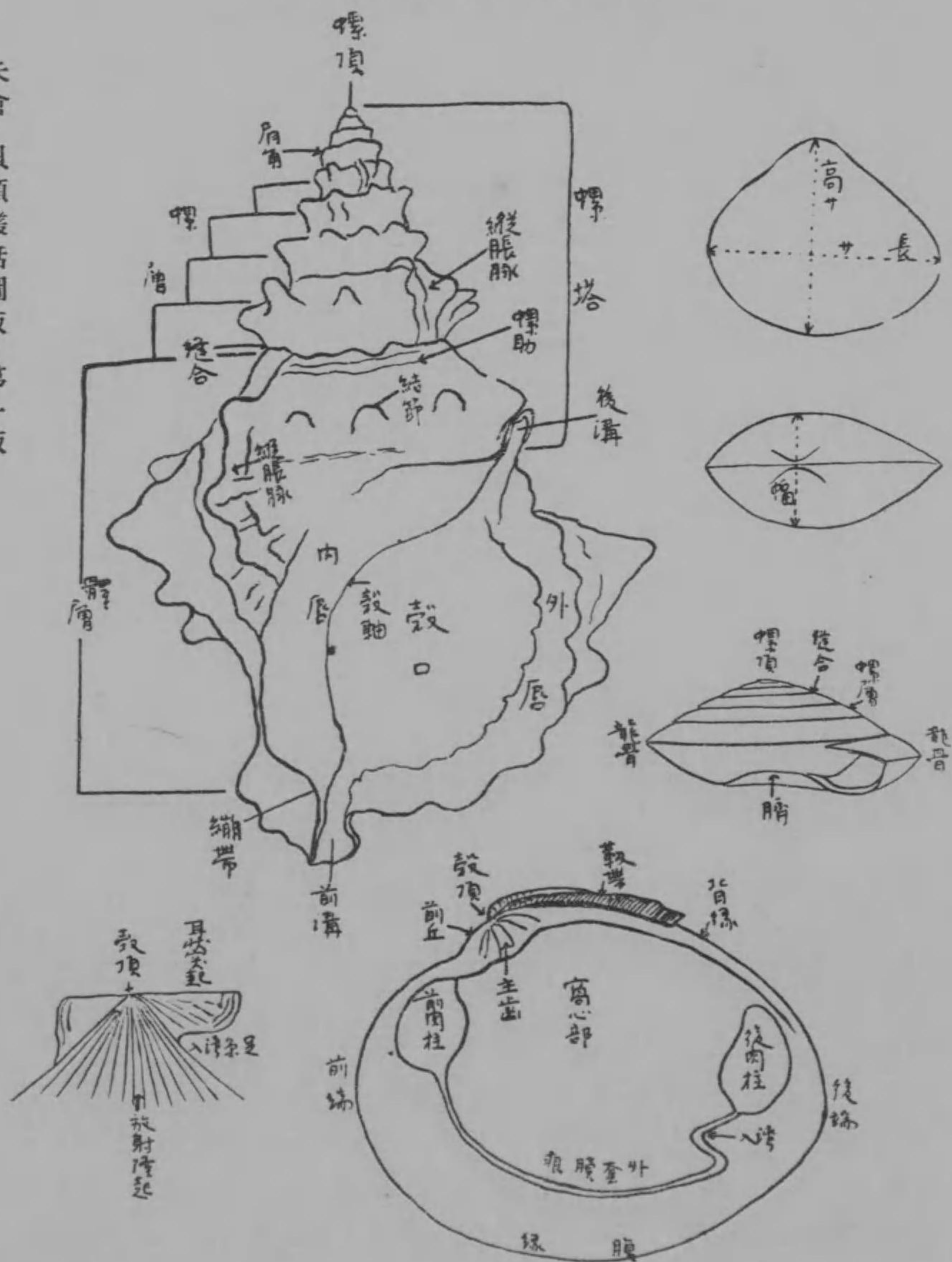
竝行板 同上に竝行せるもの、

副板 同上にある小薄板である、

皺 外唇の内方壁にある乳白色の突起物である、

呼稱の部各殻貝

矢倉—貝類叢話圖版—第一版



主皺襞 プリンシパラ、プリカ 殻口より螺層の四分一内方、丁度閉瓣に接したる所にある、長く縫合線と並行した薄板である、
 縫合皺襞 スチユラル、プリカ 縫合線と主皺襞との間に一個又は數個の小薄板である、
 外壁皺襞 バラレル、プリカ 主皺襞の下にある小薄板で、多くは數個を持つて居る、
 半月皺襞 ルネ 外壁皺襞の下から殼軸の内方へ斜に走つて居る薄板である、時としては數個に分裂して居るものもある、形に變化が多い、

貝類學用語一般

Malacology.	軟體動物學	Sinistral.	左
Conchology.	貝類學	Scientific name.	學名者
Classification.	分類類	Author.	命名者
Description.	記載	Species.	種
Monograph.	記錄	Subspecies.	亞種
Distribution.	分布	Specimen.	標本
Locality.	產地	Typical specimen.	模式標本
Habitat.	同地	Cotype.	新種として發表に採用したる標本 副模
Univalve.	單殼類 (螺類)		模式以外の標本
Bivalve.	雙殼類 (二枚貝)	Form.	型
Dextral.	右	n. sp.	新種

sp. nov.	新種	Order.	目
Variety.	變種	Suborder.	亞目
Local variety.	地方的變種	Tribe.	族
Sp.	學名未定のもの	Super family.	科群
Adult shell.	成熟せる貝	Family.	科
Young shell.	幼貝	Genus.	屬
Altitude.	高さ	Subgenus.	亞屬
Length.	長さ	Section.	區
Breadth.	幅	Hermaphrodite.	雌雄同體
Grade.	團族	Extinct species.	絶滅種
Class.	綱	Living	現存種
Subclass.	亞綱	”	”

Shoulder angle. Shoulder of whorl.

螺類	螺頂	Shoulder angle.	Shoulder of whorl.
Apex.	螺頂	Periphery.	肩角
Embryonic shell.	胎殼	Peripheral keel.	周緣龍骨
Spire.	螺塔	Umbilicus.	臍帶
Whorl.	螺層	Fasciole.	綳帶
Penultimate whorl.	次體層	Aperture, Mouth.	殼口
Last whorl. Body whorl.	體層	Peristome.	口緣
Grows line.	生長線	Canal.	水管口
Longitudinal rib.	縱肋	Posterior canal.	後溝
Varix.	縱脈	Anterior canal.	前溝
Spiral stria.	螺旋狀脈	Callous.	滑層
Suture.	縫合		

Labium.	唇		
Inner lip.	内唇	Columella lip.	唇殼部薄板
Outer lip.	外唇		
Columella.	殼軸		
Operculum.	磨核		
Nucleus.	裂帶		
Sinus band.	帶		
Streak.	文		
Septum.	壁		
煙管具			
Clausilium.	閉瓣		

Lamella	薄板		
Columella lamella.	殼軸部薄板		
Superior lamella.	主薄板		殼軸又は 内唇に ある薄 板状の 突起物
Inferior lamella.	内方薄板		
Spiral lamella.	螺旋薄板		
Parallel lamella.	平行薄板		
Fulcrum.	副板		
Plica.	皺襞		外唇の 内壁上 にある 突起物
Principal plica.	主皺襞		
Sutural plica.	縫合部皺襞		
Palatal plica.	外壁皺襞		
Lunella.	半月形皺襞		

Mantle.	外套膜		
Proboscis.	吻角		
Tentacle.	觸角		
Foot.	足		
Siphon.	水管		
Radula.	齒舌		
Rachidian tooth.	中央齒		
Lateral tooth.	側齒		
Marginal tooth.	端齒		
Dart-sack.	刺針囊		
Propodium.	前足の特化膜		

Epipodium.	兩側足の特化膜		
Columella muscle.	殼軸筋		
Eye-stalk.	眼莖		
雙殼類			
Umbo. Beak.	殼頂		
Lunule.	前丘		
Escutcheon.	後丘		
Ligament.	帶		
Ligament area.	韌帶面		
Dorsal margin. Dorsal side.	背緣		
Ventral margin. Ventral side.	腹緣		
Radiating rib.	放射隆起又は放射肋		

Radiation.	放射線	Hinge line.	蝶絞線
Concentric.	渦脈又は生長線	Cardinal tooth.	Hinge tooth. 主齒
Anterior end.	Anterior margin. 前端	Lateral tooth.	側齒
Posterior end.	Posterior margin. 後端	Cartilage.	軟骨
Angular ridge.	角隆起	Nymph.	齒丘
Obtuse ridge.	鈍角隆起	Umbonal area.	Beak cavity. 窩心部
Ridge.	壘 (隆起)	Left valve.	左殼
Layer.	層	Right valve.	右殼
Periostracum.	表皮層	Epidermis.	外殼
Prismatic layer.	棱柱層	Glochidium.	雙殼類の胚殼
Nacreous layer.	真珠層	Spat.	牡蠣の幼卵
Hypostracum.	光輝層	Labial palpi.	觸唇

Border of mantle.	外套膜緣	Retractor muscle.	牽縮筋
Gill.	鰓	Pedal retractor muscle.	足牽縮筋
Outer gill.	外鰓	Muscular impression.	肉柱痕
Inner gill.	內鰓	Pallial impression.	外套膜痕
Siphon.	水管	Pallial line.	同上
Excurrent siphon.	Anal siphon. 排水管	Pallial sinus.	外套灣入
Incurrent siphon.	Branchial siphon. 入水管	Pallial muscle.	外套膜筋
Respiratory siphon.	入水管	頭足類	
Byssus.	足絲	Mantle.	頭
Adductor muscle.	閉殼筋(肉柱)	Arm.	脚
Anterior adductor muscle.	前閉殼組	Tentacular arm.	觸脚
Posterior adductor muscle.	後閉殼筋	Funnel.	噴水管

Fin.	鰭	Crop.	臑(エゾクロ)
Shell.	甲 (貝殼)	Ink bag. Ink sack.	墨汁囊
Chitinous shell.	軟甲	Mantle cavity.	外套腔

貝類學名命名者略語彙

A.		B.	
A. Ad.	A. Adams.	Bens.	Benson.
H. Ad.	H. Adams.	Bern.	Bernardi.
Ads.	Adanson.	Blainv.	Blainville.
Anc.	Ancey.	Blanf.	Blanford.
Aud.	Audouin.	Bttg.	Boettger.
Ann.	Annandale.	Born.	Born.
			(印)
			(佛)
			(佛)
			(印)
			(獨)
			(埃)

Brod.	Broderip.	英	Chenu.	佛
Bolt.	Bolten.	同		
Brug.	Bruguiere.	(佛)		
C.			D.	
Chemn.	Chemnitz.	獨	Desh.	Deshayes.
Cless.	Clessin.	同	Dillw.	Dillwyn.
Conr.	Conrad.	米	Don.	Donovan.
Cpr.	Cooper.	同	Drap.	Draparnaud.
Cuv.	Cuvier.	佛	Ducl.	Duclos.
	Crosse.	同	Dktr.	Dunker.
	Carpenter.	英	Dautz.	Dautzenberg.
				H. Dall.
				米

E.	Ehrn.	Ehrmann.	獨	Gronov.	Gronovius.	英
F.	Fer.	Ferussac.	佛	H.	Hanley.	英
		Fischer.	同	Helb.	Helbling.	
G.				Heude.		
	Gaim.	Gaimard.	(佛)	Hilg.	Hilgendorf.	獨
	Gmel.	Gmelin.	獨	Hinds.	Hwass.	米
	Gld.	Gould.	米	Haas.		(佛)
		Gray.	英	Harklots.		獨
						(蘭)

	Hoyle.	英	Kiener.	佛	
I.	Ihering.	巴西	Kobert.	獨	
			Krauss.	同	
J.	Jay	米	Küst.	同	
	Jouss.	佛	Küst.	同	
	Jacq.	同	L.		
		英	Linn.	L. Linnaeus.	瑞典
			Lam.	Lamarck.	佛
			Lea.	Leach.	英
			Less.	Lesson.	佛
			Lisch.	Lischke.	獨
K.			Lesneur.		佛

Link.	獨	Milddf	獨
Lea.	米	Mont.	伊
		E. S. Morse.	米
M.		Menke.	獨
Marratt.	英		
Martens.	獨	N.	
Martyn.	英	Nev.	印
Middendorf.	魯	Nutt.	米
Mörch.	英		
Müller.	獨	O.	
Montfort.	佛	D' Orb.	佛
Melv.	英	D' Orbigny.	

P.

Pease.	米		
Pfeiffer.	獨	Quoy.	佛
Philippi.	同		
Pilsbry.	米	R.	
Powis.		Rang.	佛
Prime.	米	Recluz.	同
Pelseneer.	佛	Reeve.	英
Perry.	英	Reinhardt.	米
Poli.	伊	Roemer.	獨
Petit.	佛	Risso.	佛
Preston.	英	Rolle.	獨

Q.

Roberts.	英			
S.				
Schepm.	蘭	Schepname.		
Schm.	丁	Schumacher.		
Schr.	露	Schrenck.		
	英	E. A. Smith.		
Sol.		Solander.		
Sowb.	英	Sowerby.		
Swain.	同	Swainson.		
	壤	Scopoli.		
Stimp.	米	Stimpson.		
T.				
		Tap-Car.		
		Tapparone-Canefri.		(伊)
		Tryon.		米
		Turton.		英
		Thun.		
		Thunberg.		(瑞典)

Wkff. Weinkauff. 獨
Woodward. 英

V.

Tomlin.	英		
Val.	佛	Valenciennes.	
Van.	米	Vanatta.	
Verk	(獨)	Verkruzen.	

W.

Watson.	英		
Westrl.	(獨)	Westerlund.	
Wieg	(同)	Wiegmann.	
Wood.	英		

第二群 研究資料 (一)

舞子西の山に於ける

洪積層中の貝類に就て

所在地 舞子停車場より西方半哩餘、鐵道線路に沿ひたる丘陵地の東端、標高二十五メートルの低丘にして山田川に接近す、該地は山田村の舊墓地にして其の大部分は今回發見の貝殻包含層なり。

貝層の状態 貝殻包含層は、東西漸く十五間南北十餘間の小地域に限られ、一尺五寸乃至四尺の厚さにして、無数の貝殻を包含し、其貝殻は何れも淺海産のものゝみなり、最上層は黄褐色を呈せる砂層にして、微細なる貝殻の破片を混じ、ナミマカシハ、マコマ、ガンガラ、アーカ、ウニを多數に混入し、ナミマカシハは色彩を存

し貝殻堅固なれども、其他のものは多く脆弱にして摘出する事難し、其下部は細砂を混せる黄褐色の粘土にして無数のアサリを密着し、堅緻なる貝層を形成せり、アサリは原形を存するもの多けれども、脆弱直に破碎し去り、貝殻を摘出するに耐ふるものなし、而して其下方に在るものは往々雙殻完備し、殻内空虚となれるものを存す、其下層は稍堅き灰色粘土にして、クラミースの老幼を混じて密着せる貝層を爲す、此アサリ、クラミース層の間にはイガヒ、ポタンカキを包含す、イガヒは貝殻脆弱なりしもポタンカキは堅固にして殆んど化石の如く重厚なり、クラミース層の下部には五寸乃至一尺の石灰粘土の層を混入する所あり、貝殻を全く包含せず。

此下層は砂を混じたる暗褐色の粘土にして小石礫を混じ、貝殻含量著しく減少しアサリ、クラミース、アーカの貝殻は、盡く腐蝕して粘土に固着して條紋を印し、褐色を呈し更に栗褐色の石核を露出す、此下方は灰白色の粘土にして全く貝殻を包含せず。

地層の断定 包含層の地は、以前東方山田川まで連続せしものならんと思はる、現在の面積は狭小にして南東に向つて傾斜し、貝層は南東に傾斜せる線と、西南より東北に緩く傾斜せる線を相交又せる點に於て、貝層最も厚く、包含の量密なるが如し、是に依て考ふるに該地は洪積層の末期に於ける海成段丘の一部なりし事疑ひなかるべく、現世に於ても斯かる類例に乏しからず、我縣下但馬の貝濱の如き是れなり、該地は居組かぐみの對岸、孤島の一部にして廣さ漸く二十坪餘、長三角形を爲し東北は日本海に向て展開し、冬季日本海の怒濤は無數の貝殻を此三角形の傾斜地に堆積し、厚さ數尺の貝殻層を爲す。

貝殻の比較 包含せる貝殻は總て現生種にして、舞子沿岸に産するものに對比せんに、ナミマカシハは色彩尙存し、現生種に比し概して小形なり、包含量より考ふる時は、現代の方繁殖せるを知る、アサリは著しく長大にして多く左殻を包含せるは注意すべし、アサリは左殻を下にし棲息せるものと思はる、現生種は盛んに漁獲す

アサリの殻、現生種との比較

高さは殻頂より周縁に至る寸法、長さは貝の前後の寸法なり、曲尺を以て示す、單位厘

高さ	長さ	産地
一三七	二二〇	西の山
一三七	一九八	同
一三五	一九五	同
一二七	一八六	同
一三〇	一七八	大森貝塚
一一三	一五五	王寺貝塚
一一〇	一五五	姫路貝塚
一二四	一七八	西宮
一一八	一五八	八戸
一一九	一五三	播磨
一一〇	一四八	紀伊
一〇三	一四〇	淡路

現生種

クラミース *Chlamys* は從來本邦に採集せられたるものと異り、多分新種なるべく、其包含量の多きと大部分、右殻片なるは注意すべく、該種は絶滅に歸せしものならん。

クラミースは他の雙殻類と異なり、足(通稱舌と云へるもの)を以て匍匐せず、右殻を下にして海中を飛躍す、休止せんとする時は、右殻耳状突起の前方にある切れ目より、足絲(*Bysus*)と稱する織毛を出して他物に附着す、包含層に右殻片多きは其習性に基けるものならんか。

現生種の最近似なるものは、アハチチヒロにして淡路の南部海に多く産し、(須磨以西伊豫邊にも)殻稍高く、放射隆條數、尠きを以て兩種を識別することを得べし。

クラミースとアハチチヒロとの比較

クラミース	アハチチヒロ	(單位厘)
高さ	長さ	左右殻の別
二〇六	二一〇	右殻
	條數	
	二五	

アハチチヒロ (現生種)		
二〇五	二二〇	同
二〇三	二一五	左殻
一九三	一九七	右殻
一七五	一八二	同

ボタンガキ又クツガキ、イハカキと云ふ、現生種に比し小形なり、最初イタボカキの老成したるものに非ずやと思考したるも、イタボカキは圓形或は長三角形に發育し、貝殻比較的輕きに比し、ボタンガキは不規則に發育して灣曲し、殻質重厚なるが故に、識別する事を得べし、淡路の南海には多く産し、播磨灘、四國、志摩及び日本海方面にも産す、包含層よりイガヒに固着したるものと、老成の貝殻片の三箇に剝離せるを採集せり、曩に淡路より採集せる老成種のイガヒに固着したるものあ		
一九六	一九八	右殻
一六六	一七八	同
一六三	一六九	同

りて殻厚さ約二寸に達し、今回發掘せるものと同種なる事を確定し得たり、我沿海にては未だ採集せし事なし。

要するに洪積紀の貝類と現生の貝類とはアサリの長大に發育せる外、種の形態に何等の差異を認めざるも、分布上より見る時は、絶滅せしもの、産額の増減せしもの、現時我沿海に産せざるに至りしもの等ありて、氣候の寒暖、潮流に供ふ海底土質の變化に大なる變遷を生せしを推知するを得べし。

貝殻層中より採取せし貝類は二十一種あり、其包含位置と我沿海の現生種との對比をなさんに

貝名	包含位置と數	我沿海現生種
一、ナミマカシハ	上層に多し	現生の方多
二、ヒメシラトリ	同	尠し
三、コシタカガンガラ	上層に尠し	多し
四、アーク	上中下層に多し	未採集

五、イトカケガヒ	上層に數個	同
六、辰	同	稀
七、アサリ	上中下層に尠し	尠し
八、△ギガヒ	上層に少しく	同
九、イガヒ	中層に四個	同
一〇、ホタンガキ	同 十數個	未採集
一一、エゾニシキ?	上中層に多し	同
一二、Ohlamys sp.	上中下層に尠し	なし
一三、Lima sp.	上層より一個	未發見
一四、マテガヒ	同	尠し
一五、クロツケガヒ	同	多し
一六、シホフキ	同	未採集
一七、マツカゼ幼貝	上層に數個	尠し
一八、アカニシ	中層に一個	多し
一九、Natica	上層より一個	未詳
二〇、ヤマトシハミ變種	同 數個	なし

二一、サルボウ

中層より一個

跡し

(大正七、四、一、兵庫教育)

註

五、イトカケノ一種、一二、クラミースは大正十一年九月京大地礦講師理學士
横山次郎氏により新種として發表せられた。

5. *Epitonium harimense* Makiyama.

12. *Pecten Yagurai* Makiyama.

▲カシチヒロ (矢倉) Pl, 2.

矢倉一貝類遊話圖版一第二版



Pecten Yagurai Makiyama.
(倉矢) るひちかむ



洪積層中の貝類 (新種)

かたつむり

明治天皇御製

さゝやかに見ゆる家居もかたつむり

ひとり住むにはことたりぬべし

蝸牛は京阪地方にてはデンクムシ、関東地方にてはマイク、マイツブリなど、稱し、各地方により多少の稱呼を異にせり。學術上廣義に解釋すれば蝸牛科ヘリツクスに屬するもの悉く之を蝸牛と稱し得べし。日本の蝸牛科には十屬二百八十種を含む。

蝸牛は有肺類に屬し、肺腔を以て呼吸し、多くは球形を爲し螺旋せる貝殻を有し十數種を除く外全部右巻なり。右巻とは殻軸を中心とし螺層右方に降下し殻軸の右

方に殻口を開き、或は螺頂を上とし俯視すれば殻の中心右方に殻口を有するものを稱するなり。

生殖門及び肛門は内臓に在りて體の右方に開口せり、柔軟にして厚き外套膜を以て掩はれ、大なる足及び判然たる頭部を有し、長短二對の觸角を有し、長き方の先端に眼を具し、短き方は觸角なり、二對の觸角は自由に體内に萎縮するを得。觸角の基部中間に口あり、口内には齒舌^{ラテユラ}と稱する齒と舌とを兼備せる鋭き齒を密生せる鑷狀の長き帶を有す。歐洲産ヘリツクス、アスパサーに在りては齒舌の數一萬五千ありと云ふ。此齒舌を迅速に運動せしめ食餌を攝取し且つ咀嚼するものとす。

(圖版第三版二)

蝸牛は濕潤なる樹葉多き地に棲み、樹葉或は蔬菜の葉を食とし、時に大害を興ふる事あり。乾燥に遇ひ或は冬眠を爲す時は、殻口に白膜を張りて萎縮す。雌雄同體なれども異體と交接して産卵す、生殖門は左巻に在りては左方に開口す。

蝸牛は全國至る所に分布し、各地に共通なもの或は一地方特殊のものを産す。縦令ばオナジマイマイは全國に産し、ヒダリマキマイマイは關東地方には普通に産すれども關西地方には之を見ず、カタマイマイは小笠原島に限り産するが如し。

陸産の分類は淡水産及海産貝類と同じく、貝殻の構造、齒舌の形式、内臓生殖器の形態等を比較研究して分類せらる。今蝸牛料を

A、刺針囊 (Dart-Sack) を有せざるもの

B、刺針囊を有するもの、二に大別す

Aはクロリチスよりマンダリナに至る五屬を含み、Bはブリミノブシスよりプレクトツロピスに至る五屬を含む、此刺針囊中には牙狀を爲せる石灰質の小骨片を有す、其用途は不明なれども多分生殖作用に應用するものなるべし。(圖版第三版三) 童謡にデンデンムシ角出せ鎗出せ、あたま出せ云々と謂ふ鎗出せと云へるは此ダートの事にはあらざるか。

以下は蝸牛科の各屬に就て其特長の要領を略記する事としたり。

Aに屬するもの

1. Chloritis.

ビロウドマイマイ

殻中形、薄く球狀或は稍扁平なる球狀にして、茶色の表皮を被り、短く硬き
纖毛を密生し、殻口反曲し口内は白し、十三種を含む。

2. Moellendorffia.

ケハダマイマイ

殻中形、薄く球狀を爲し、螺頂凹む、茶褐色の表皮を被むり、纖毛を密生す
る事前種よりも著しく、殻口反曲して厚し、四種を含む

3. Plectopylis.

イトカケマイマイ

殻小形、螺層多く扁平にして、臍口大きく絲掛狀の鋭き彫刻を有し、殻口反
曲し半月形を爲し、内唇に薄板隆起ありて殻口を圍む、一種を産す。

4. Ganesella.

ガネセラ屬

殻大、中、小形各種あり、多くは球狀を爲し、螺層丸く殻滑かなり、彫刻を
有するあり無きものあり、殻口曲反し、概して臍口小なり、殻軸の下部に隆
起物あると無きとあり、五十五種を含む。

5. Mandarinia

カタマイマイ

殻中形、堅固なり、球狀なると稍扁平なるとあり臍口小なると無きとあり、
殻口反曲して厚く滑かなり小笠原島及び大東島のみ産す、化石を合して十
三種を含む。

B、に屬するもの

1. Buliminopsis

ホンマイマイ

殻小形、薄く螺塔高くチクサガヒ狀なり、微かに生長線を刻し、三種を含む。

2. Trishopita

オトメマイマイ

殻小形、薄く球狀にして螺塔高く稍三角狀なり、殻口反曲し生長線を刻し滑

かなり。

3. *Eulota*.

ユーロタ属

従前ヘリックスと稱したりしも、解剖の結果ユーロタ属(日本産は)と稱す、概して大形にして、殻口反曲し、螺塔低く臍口を有す、分布廣く蝸牛科の大部分を占む、三亞属を含む。

S. G. Eulotella.

殻小形、薄くオトメマイマイに似て螺塔低く臍口あり、殻口反曲す、オナジマイマイは最廣く歐米大陸にも分布す、十種を含む。

S. G. Acusta.

ウスカハママイマイ

殻中形、薄く毬状を爲し、茶褐色の表皮を被り、皺状の彫刻を有し、殻口は反曲せず或は輕微なり、大小十二種を含む。

S. G. Euhadra.

概して大形なるもの多く、條紋彫刻を有し美麗なるもの多し、殻口著しく反曲し、普通かたつむりと稱するものは該亞属中に包含さる、變種多く約七十種を算すれども之を統括すれば四原種に歸す、即ちヒトステマイマイ、ミスヂマイマイ、クロイハママイマイ、ヒロオビマイマイ之れなり。

一、ヒトステマイマイは肩角部に暗栗色の條線を有するが故に名あり、四國、九州、琉球に多く産し東北地方にも分布す。

二、ミスヂマイマイは前種より稍殻薄く殻口大なり、螺層に斷絶せる三帯を有するを以て名あり、關東地方に多く産し、變種は廣く分布す美麗なる蝸牛なり。

三、クロイハママイマイは大形にして殻厚く生長線と並行せる黄、褐色の斑紋あり、斷絶せる線條を有す、殻口著しく反曲し口唇は厚く臍口大なり、關西地方に多く分布す。

アハクロイハマイマイは前種の變種にして暗栗色の地に條線を有し、殻口の反曲は著しからず、阿波南部に産し大なるものは直径二寸を超え、前種と共に本邦産蝸牛中の最大なるものなり。(圖版第三版一)

四、ヒロオビマイマイは中形にして殻薄く螺塔高くして微細なる彫刻を有し、廣き黒褐色の帯を有す、殻口反曲著しく臍口は小なり、伊豆天城山は原產地なり。

以下本縣下に産する代表的蝸牛數種を掲ぐ。

Eulota (Euhadra) callizona nipponensis Kob.

ハリママイマイ(平瀬)

殻中形、螺塔高く稍三角形、鋭き彫刻と緻密なる螺脈を刻し、多くは暗褐色の帯一二條を有し、殻口半月形を爲し下方に傾向す、攝、播地方に産す。

Eulota (Euhadra) callizona amaliae Kob.

クチベニマイマイ(平瀬)

殻は前種より大きく且薄し、微かに彫刻を有し螺脈著し、廣き一二條を有し光澤あり、殻口の縁に微紅色を彩り美麗なり、各地に分布す。

Eulota (Euhadra) callizona maritima Pils. & Gude.

セトウチマイマイ(平瀬)

殻は前種より厚く、殻口稍下方に傾き反曲し、口唇内白く、前種より幾分角張りて丸し、本種の模式産地は淡路福良にして、沼島に産するものは、螺塔稍低し、播磨、攝津に産するものは殻稍薄く、別種の如き觀あり、瀬戸内海沿岸地方に産するを以て名あり、前種の如く分布廣からず。

Eulota (Euhadra) peliomphala herklotsi Mart.

ハークロマイマイ(平瀬)

殻は前種に比し螺塔低く幅廣し、螺脈鮮明、生長線に沿ひて所々斑紋を形成し、

斑紋下に一條の帯を有す、殻口稍橢圓に近く、口唇には微褐色を彩るを常とす
本種は縣下に最も廣く且つ多産す、セトウチマイマイと鑑別する事困難なり。

S. G. Coniglobus. クリマイマイ

殻中形、球状にして螺塔稍尖り栗色を帯び恰も栗實の如し、彫刻竝に光澤
を有し美麗なり、殻口反曲し口唇白し、左巻と右巻とあり、五種を含む、
臺灣にのみ産す。

4. Dolicheulota ナガマイマイ

殻中形、厚く螺塔高く圓錐形を爲し、螺層滑かにして緻密なる螺脈を刻し、
斑紋を有す、殻口長橢圓形を爲し反曲せり、恰も田螺の如し、臺灣南部にの
み産し三種を含む。

5. Plectotropis. オホケマイマイ

殻中形、螺塔低く扁平にして厭搾せられたるが如く螺層は直線に傾斜し銳き

龍角を有す、微かに彫刻を有し、茶褐色の薄き外皮を被り、龍角の周縁に於
て纖毛を具有す、殻口歪半月にして反曲す、臍口大なり、大小三十七種を含
み各地方に廣く分布す。左の二亞屬含む。

S. G. Aegista. オホペンマイマイ

殻中形、螺塔低く扁平にして、螺塔殆んど水平を爲せるものあり、周縁丸
く殻口圓形に近し、臍口甚だ廣く大なり、大小三十種を含む。

S. G. Coelorus. クチマガリマイマイ

殻小形、低き圓錐狀を爲し、龍角鋭く殻口下方に曲り、口内厚く内唇縁に
隆起物を有す、粗糙なる表皮を被る、三種を含む。

左巻蝸牛。陸産淡水産及び海産を通じて左巻なるものは尠し、陸産千餘種中キセ

ルガヒの二百三十種、ヒダリマキゴマガヒの四種を除くの外、蝸牛の變種を合して

十二種のみ、普通種なるヒダリマキマイマイは、關東及東北地方には廣く分布し、分布區域の西端は伊勢の津にして、又左巻の一種タカヤマヒダリマキマイマイは近江伊吹山を限れり、要するに鈴鹿山脈以東にはヒダリマキマイマイ三種、オホタキマイマイ二種、タカヤマヒダリマキマイマイ一種の六種を産し、中國地方、四國、九州には全く其跡を絶ち、琉球列島久米島に一種、八重山に一種及び臺灣南部には異りたる四種を産す、(圖版第三版四、)

食用蝸牛。 歐米人は邦人の田螺を食用とするを不潔なりと云はん、我より見れば歐洲人の蝸牛を嗜食するは何となく不快なる心地す。其起源は古く羅馬時代に始まり、巴里の料亭に蝸牛料理を賞味するに至りしは十八世紀の末よりなりと云へり。パーガンデー一洲は蝸牛養殖場の中心地にして多數の養殖場あり、食餌を與へ、秋肉肥へたる頃、採集して市場に出す。

蝸牛を大鍋中に投じて湯煮し、肉を引出し臟腑を除き、香料を加味して再び殻中に詰め込み、殻の儘皿に盛り、或はフライして食す、巴里市中に費す所一ヶ年數百萬個に達すと云ふ。

一般食用に供せらるゝ蝸牛は、ユーロツピアン、スネールと稱するものにして學名をヘリツクス、ボマチアと云ひ、毬状のものなり、其外ヘリツクス、アスパーサ及びヘリツクス、アペルタ等多く賞用せられ、就中アペルタ最も美味なりと云へり。獨逸、佛蘭西、伊太利、西班牙及び英吉利等に廣く分布し、其他小形なる食用蝸牛數種あり。

我邦にて古來むしくすりと稱し、藥用に供する事間々あれども、食用に供するを聞かざりしに、阿波國に在りては大形蝸牛を饒産し、同地方小兒の間食に自ら蝸牛を採集して殻を打ち割り焼きて嗜食すと云ふ又一奇なり。蝸牛は味淡泊にして、田螺の如き臭癖なくより多く味附を要すと云ふ。

蝸牛に関する童話 各地方特殊の趣味多きもの數種を左に掲ぐ。

か た つ む り

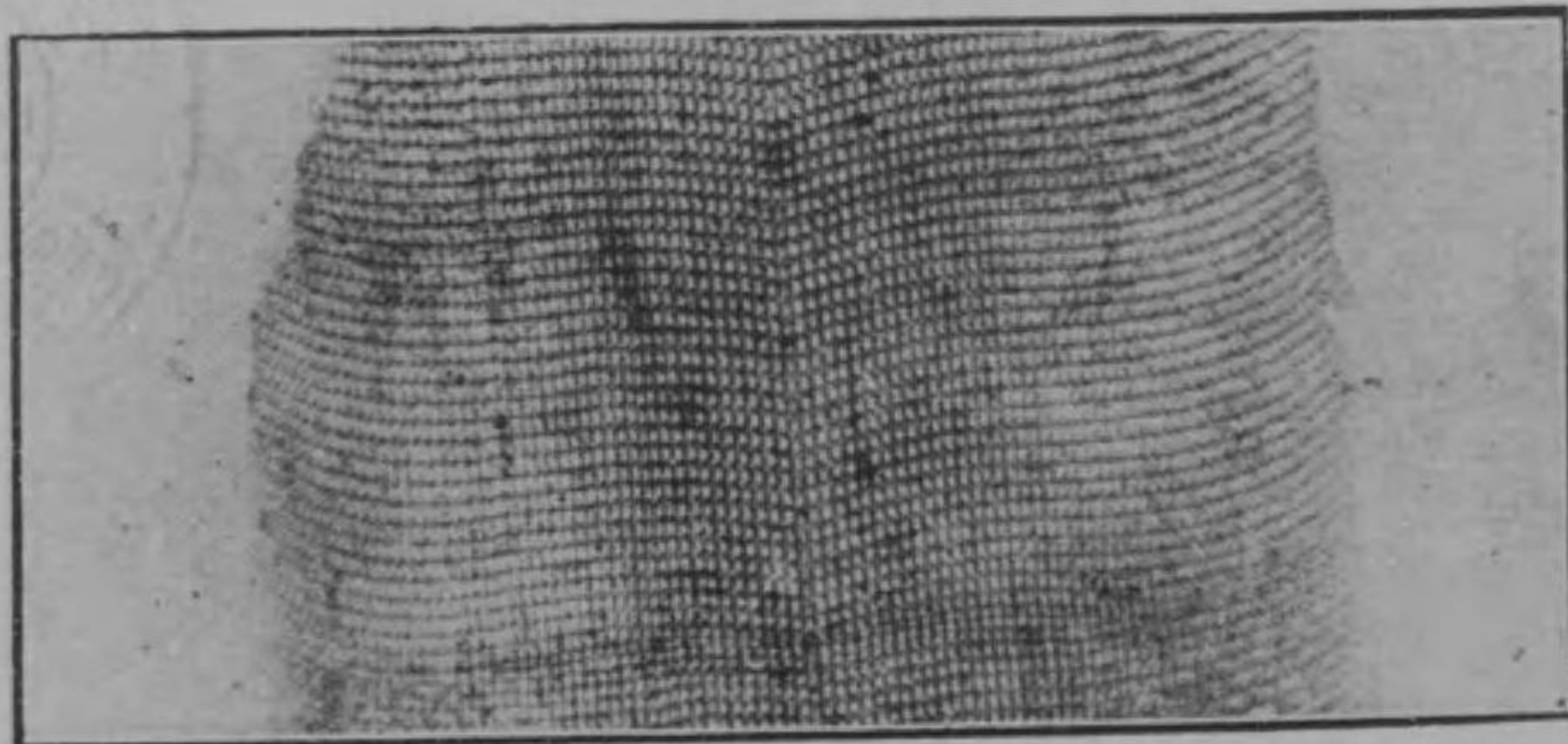
1、あはくろいはまい



3、同上刺針



2、同上齒舌



4、ひだりまきまい



矢倉―貝類叢話圖版―第三版

かたつむり角だせ、角だしたら錢百くれるや、男だら扇三本くれるや、女だら針三本くれるや。(羽前)
 はーぼろつぼろ(蝸牛の事)角出して見せぬと臍くそぐつこ(こそぐるぞ)。(下野)
 まひまひつぼろ、まひくつぼろ、うちの垣の下にけんかあるから、つのだして見せる、やりだして
 見せる。(水戸)
 だいろく(蝸牛の事)角出せ、角出されば代官所に願ふぞ。(甲斐)
 めーめーこんしよ(蝸牛)つーのーだーせーこぬかー三升やーろーにー。(名古屋)
 でんぐでんのむし、でにや尻にやいこしよ。(西播州)
 だいくむし、だいく虫、雨も風もふかぬけん、角ちさだせよ。(出雲松江)
 つまめく、つられておざれ、おざらんさ、からわつてやる。(屋久島)

かたつむりつのふりわけよ須磨明石

芭蕉

(大正八、六、一、兵庫教育)

寶貝及び貝貨に就て

先史時代の住民に在りては、簡易なる生活を爲せしが爲め、交易の必要を感ぜざりしに、人文漸く進むに伴ひて、慾望も多くなり種々の嗜好心向上するを以て従て物々交換の必要を感ずるに至る、而して思想未だ幼稚なる時代に在りては、先づ宇宙の宏大なる現象に接觸し、天體、山嶽、樹木等に神靈の存在を認め之れを崇敬し造化の微妙なる生殖器を神聖なるものとし崇拜するに至れるは自然の理たりと謂ふべきか、中世其思想益々旺盛を極め、現代尙ほ其遺風を存せるに徴するも明らかなり、特に南洋方面に其色彩濃厚なるは注意に値す。

大學紀要、松村暎氏ミクロネシア記載中、新南洋パラオ島青年會館の破風に女子の下肢を展開せる木製彫刻物の裝飾を掲ぐる圖あり、又小生もピリリユー島會館に同上の彫刻物ある寫眞を藏す

我琉球、及び印度の沿岸に産する貝にて、徑八分内外、背面黄色を呈し陶器の如き麗はしき艶あるものあり。腹面に當る殻口は長く狹まり、其兩側には十數個の皺あり女陰に彷彿たり、一掌能く十數個を握擲するを得べく、其美しき光澤、愛らしき形態は自ら嗜好心を起さしむ、原始の住民此貝を以て物々交換を爲せるが實に通貨の濫觴にして貝を寶貝と云ふ、抑々此寶貝を交換の資料に供せしは生殖器崇拜の思想より來れる事明かなり。

貝字は寶貝の象形文字にして、寶は六に从ひ玉に从ひ缶に从ひ貝に従ふ、皆珍重すべきなれば寶と云ふ、貝字はタカラと訓し、賣買貸貨財購賃貯費賤賞賜等の字皆貝を附す、我國にては、寶貝を通用せし事なきも、琉球、小笠原島等に産する寶貝の一種、大形漆黒色の八寸寶なる貝あり、古名宇萬の久保加比と云ふ、久保は女陰の義なり、上古琉球にて交換に供したるもの、如く、此貝は妊婦の分娩期に握りて安産を得ると信じ、子安貝と稱す、舊儀を重んずる家庭に珍藏せらるゝを常とす

是れ亦生殖器崇拜の思想より出でたるものに外ならず。

子安貝二見の浦を産湯哉

其角

寶貝を何年前始めて通貨として流布せしやは不明なれども、約三千年前盛んに流通せしもの、如し、説文に曰く、古者貨貝而寶龜、周而有泉、至秦廢貝行錢云々とあり、秦以後に至り寶貝漸次其迹を絶ちしものならん、寶貝のこと多く文獻に徴するのみにて、未だ遺物の證すべきものなかりしが、去る大正二年五月支那河南省彰德府の土中より寶貝二種及其模造骨製品、銅製品を發見せり、貝は寶貝の背部を研磨して扁平と爲せるものと、寶貝の一種ハナピラタカラの背面前端に近く穿孔せるものにして、骨製品は殻口を模倣し、背部は扁平と爲し、前後に二孔あるものご中央に孔を有するもの及び殻口の彫刻皺なきもの數點あり、銅製品は薄く前記の寶貝を模したると覺ぼしく、背部窪めり、此有孔のものが花瓣寶にして、研磨せるものが寶貝に限られたるは如何なる理由に基けるかは疑問にして素より確たる論

據を有せざるも、由來寶貝は花瓣寶に比し産額僅少なれば、原産地より支那へ移入せし數量も稀尠なりしなるべく、産地より採集する寶貝中、背面缺損して大孔を穿てるものを往々混ざる事あれば、此缺損部を研磨して平滑と爲したるが、後型式となりて存せしには非ざるか、兎も角穿孔せるものを繋ぎ或は衣服に添綴して裝飾となし、或る場合交換用としての相當の價格を持し、全く通貨として流通するに至りしものと思はる。

寶貝の原産地と支那との距離、甚だ隔絶し居れば、寶貝の輸入量も他の如く潤澤ならざりしなるべく、寶貝を尊重する觀念も一層深厚なりしものと察せらる、人文の進化に伴ひ寶貝の輸入も漸次減退したれば、茲に骨製の寶貝模倣物を作り、銅製貝貨は著しく後世の意匠に成りしものなるべく、斯くて貝貨より鑄造貨幣に至る變遷と其經路を知る事を得べきなり。(圖版第四版一)

寶貝は學名を *Cypraea moneta* L. と云ひ、英名 Cowry shell, Money cowry. 等稱す。

主産地は印度沿岸のマルヂブ島、マラバル海岸、セイロン島及東印度にして我琉球小笠原島及南洋にも産す、表面黄色なるが故にキイロタカラと云ひ又形によりメンガタタカラ(面形寶)と云ふ。印度の内地は現今尙ほルービー貨に混用し、(ルービーに對し寶貝六千四百四十四個を要し、サイアムにては一チカル(一志六片)に對し六千四百個を要し、臺灣、フヒリツピン、南洋の土人は寶貝を添綴して裝飾と爲す。

(圖版第四版二)

西アフリカ内地にては現今尙流通しつゝあり、十八世紀の末期に於て印度より西海岸に年々二千五百噸乃至三千噸の寶貝を輸入し、一弗に對し寶貝六十個と交換し若き美婦は寶貝六萬乃至十萬個と、年増のものは二萬個の寶貝と交換し、在カルカッタの紳士は邸宅の新築費を寶貝にて支拂せし事ありしと云ふ。

以下臺灣、南洋方面に於ける貝の通貨並に貝貨代用品に就き略記すべし。

臺灣宜蘭の貝貨

芋貝を幅三分五厘、長一寸短冊形のものとして爲し、七個乃至十二個を糸にて繋ぎ連結したるを頭髮巻と爲す、金貨同様通用し、罰金、結納に使用せらるる類品數種あり、又瑋渠の化石を徑二寸五分、厚一分五厘の圓板と爲せるもの四個をアンペラを網代紐とし、之れに赤、紫の毛糸を編みて縫附たるものに取附け、其間隙に小鈴を配したるを頸飾と爲す、是亦豕と交換し金貨同様通用す。

樹杞林附近の貝貨

新竹廳下樹杞林附近のラハウ社の蕃人には幅一尺三寸餘丈二尺一寸餘の蕃布に徑一分厚五厘管狀と爲せる微細なる貝を縦横畔形に無數添綴せるをピニトワンと稱し、嫁を娶らんとする時先づ嫁の程度に應じて此ピニトワン十數枚乃至數十枚を與へて結婚す、内地の結納とは異りピニトワンと嫁と交換するなり、ピニトワンは結婚に絶對的のものなるが故に青年は常にピニトワンの製作を怠らず若し要望せらるゝ數に満たざる時は嫁は得られざればなり、又罰金を科せられたる時ピニトワン若干を納む。

阿緱附近の貝貨。直徑一寸五分内外、芋貝の螺層部を磨き扁平圓板狀と爲せるものを通貨とす、又同品二十八個を幅一寸九分、丈四尺赤絨に添綴し、南京玉を配して裝飾せる帶狀のものを右肩より腋下に垂れ、檳榔子袋又は煙草入袋を取附く、恰も大綬章の如きものにして頭目の佩用する彼等唯一の裝飾品なり。

臺南極南の孤島 紅頭嶼には今より四十年前貝貨を通用せしも現今はさる事なしと云へり、其貝貨は徑約一寸一分、厚さ四分二厘恰も算盤珠の如くして周縁は鈍角を有す、瑋渠製ならん。

臺灣各地方に用ひらるゝ頸飾に多く、ピニトワン風の微細なる貝を繋ぎ南京玉を配したるものにして、前記芋貝製のものと共に何れも臺灣に産せざるものゝみなれば、支那人を介して南洋方面より輸入したるものなるべく、其貴重せらるゝ推して知るべし。

南洋諸島の貝貨。地球上貝の産地と稱せらるゝ南洋諸島の沿岸には各種の貝類を饒産するのみならず、美貝の豊富なること、亦他に其類例を見ざる所なり、左れば各種の貝類を用ひて裝飾品を作り、貨幣の代用品をも製作するは自然の趨勢と云ふべし。

ボルネオ、ニューギニア、ニューアイルランドにてはスボンジイルス（海菊の一種）にて作れる赤色の貝貨あり、ボルネオのものは徑六分内外、厚二分内外、ニューギニアは徑四五分、厚一分内外、何れも圓孔を穿ち石、木實等を交へて頸飾と爲す、ニューアイルランドのものは特に微細にして直徑漸く一分二三厘、厚二三厘に過ぎず、纖維製の細絲を通じ、手頸より中指の先端に至る寸法を以て一マークに通用し其濃紅色なるものは人身賣買に供用せらるゝ云ふ。

ニューブリテンにはナツサ（ムシロガヒの一種）の殻背部を切斷して籐に通したるを臂より中指の先端に至る寸法を以て一マークに通用す、又黒き（マベ？）前掲の如

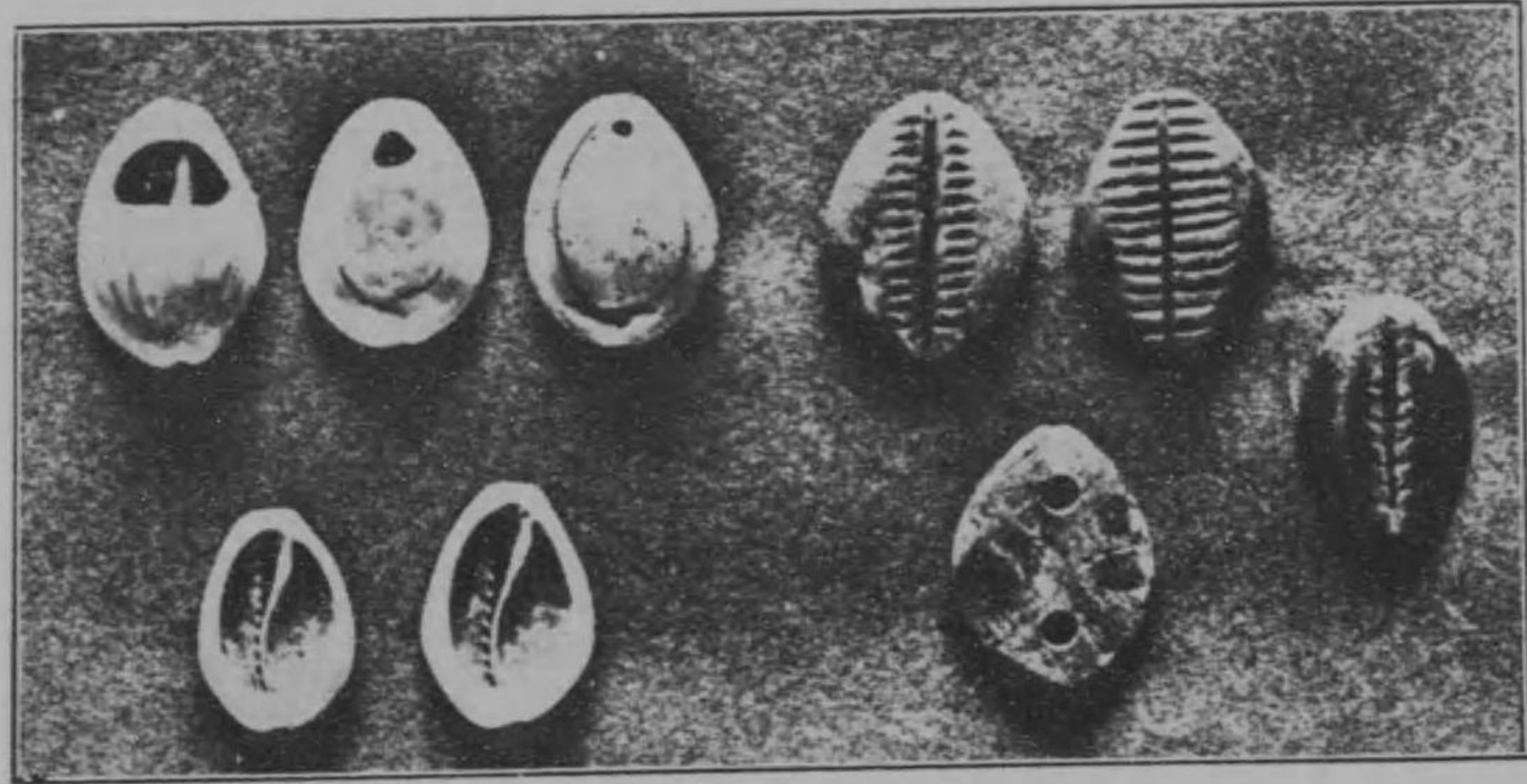
き小貝貨あり、尙朝鮮榮螺（通稱玉貝）の殻を交換に使用する事ありと。

マヌス島（アドミラリチー）にてはインブリカリアにて作れる白色微細なる、臺灣各地にて使用せると略同じき貝貨あり、同島婦人舞踏の時に纏ふ纖維製の前懸（土語ブルブル）に貝貨（土語タンブ）を装綴し、其帶紐はタンブなり、其他頸飾、腕飾、兩肩より斜に腋下に交叉せる裝飾、脚飾等皆此タンブを使用せり。

ヤップ島の貝貨。新南洋ヤップ島には直徑四寸内外黒蝶貝（我琉球にも産す、暗綠色を有する二枚貝）の兩端を切斷し、表皮を磨きたるもの、殻頂下に穿孔し、椰子纖維製の細繩を通したるもの、四個乃至六個を更に椰子繩に垂下したるもの一連を通貨とす、（左圖向つて左）尙直徑七寸内外、濠洲附近に産する蝶貝を磨き、太き椰子繩を附したるもの一個毎に通貨とす、（左圖向つて右）用途は食料品の購入、新築祝、豊作祝、婚約等にして蝶貝（大形の方）貴重せらる。

案するに先史時代住民の遺棄せる石礮は武器として使用したる外、特に美石にて

貨貝と貝寶

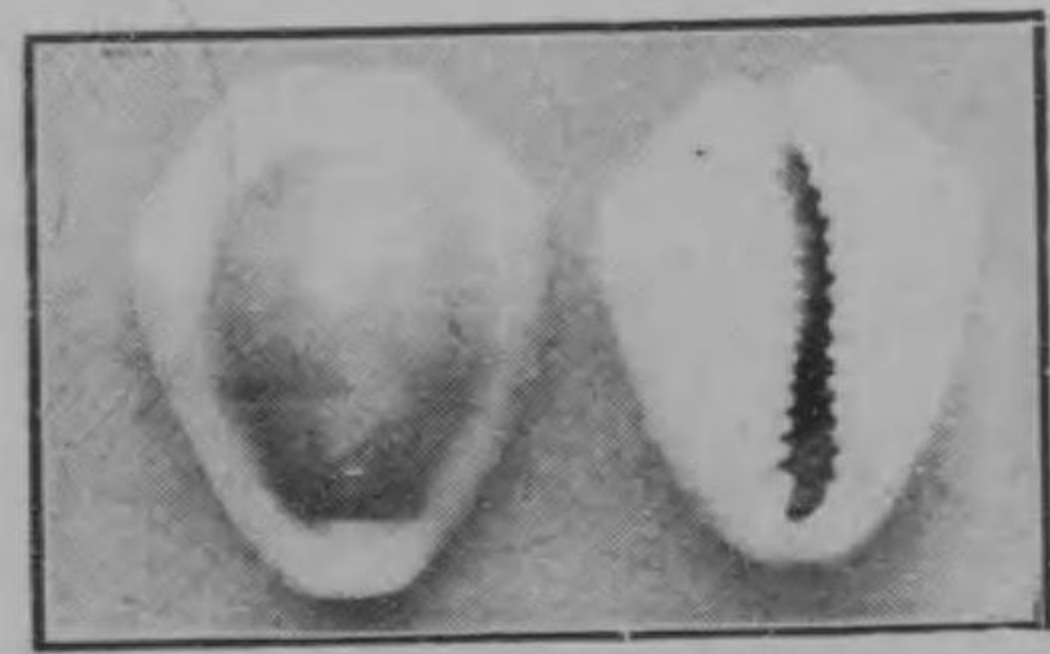


1 支那發掘貝貨

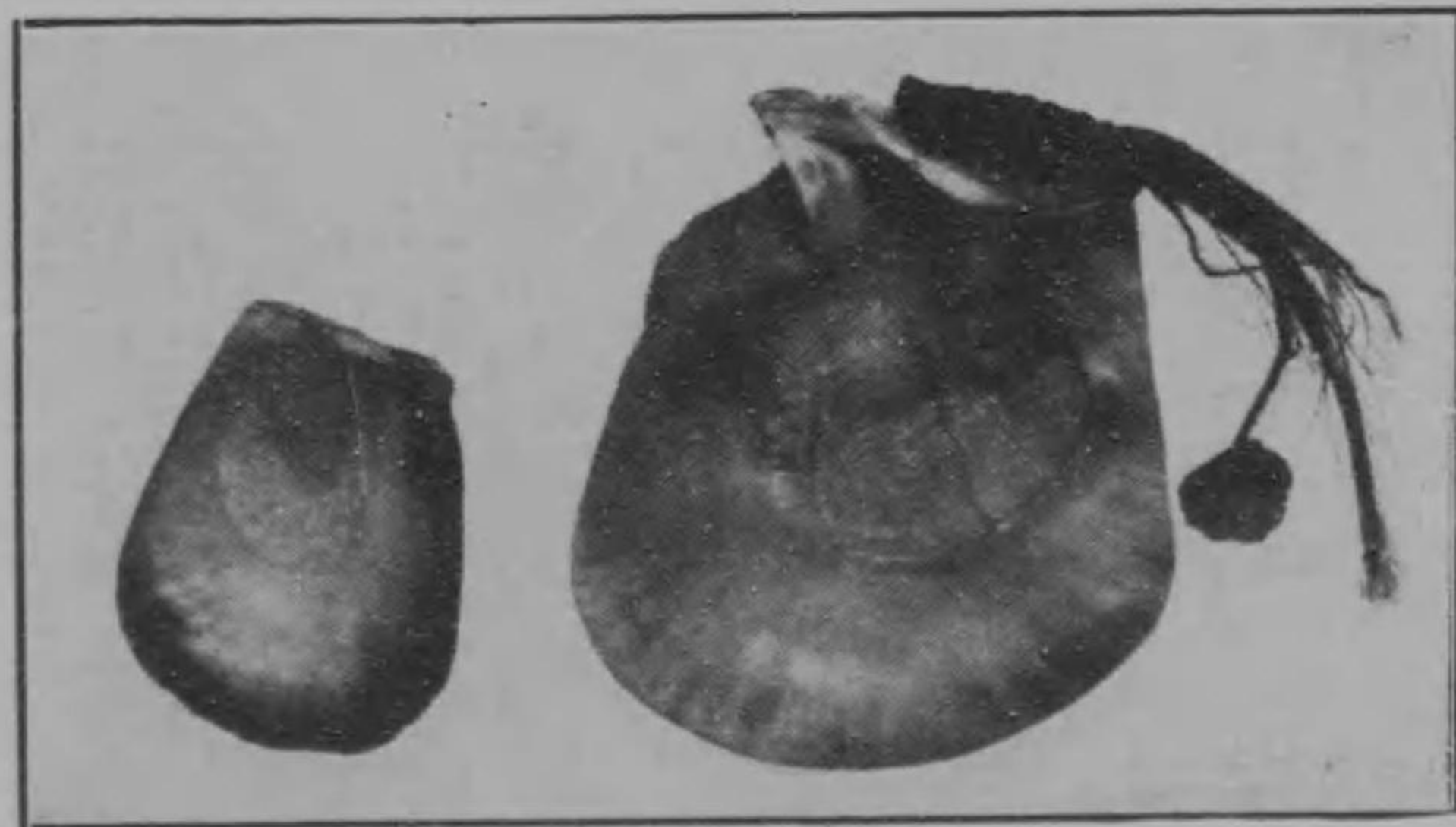
銅製貝貨

骨製貝貨

寶貝貨



2 寶貝
(現生種)



3 ヤツブ島貝貨

矢倉―貝類叢話圖版―第四版

作れる小形石礫に至りては、純然たる賞玩品にして、彼の勾玉、管玉、瑠璃玉等の裝飾として佩用せしに止まらず、冠婚祝祭等の典物に兼用せしものなりと云へる、古錢大家故今井貞吉氏の卓見に左袒せんとす、故ラムスデン氏の銅鏤を朝鮮古代の通貨代用品と云へる説等参考に資すべし、臺灣、南洋の土俗を通觀するに頸飾、腕飾の類を婚約の贈物と爲し、我欲する物品と交換する等に徴して、古今を通じて其揆を一にする事を窺知するに難からず。(圖版第四版三)

註 ホルネオの貝貨はヒメシヤコの赤きものにて作る

(大正八、一〇、一、兵庫教育)

いたばかき

牡蠣は石炭紀に現出したが、本邦では新らしく、侏羅、白堊紀に至り化石を包含して居るが、他の貝類に比し分布は尠い様である、クツカキ(大形重厚のもの)最も多くナガ、キ、カキ(マガキ)を少数を発見したに過ぎない。降つて石器時代に至りカキは著しく繁殖して居つた、斯は各地の貝塚に包含する量の多きと能く完全に發育して居るのを見て、考察する事が出来るのである。

板浦蠣は石器時代に始めて發生したものである、下總余山、國分、武藏權現臺、尾張熱田、備中津雲の各貝塚より發見せられし位に止まり、カキの如く繁殖して居らなかつたのと、分布區域の狭いのは注意すべき事で有つて、要するにカキとイタボカキとは棲息の場所及び發育の經路に相違ある事を考へねばならぬ。

板甫蝨は六月より九月に至る長期に涉り産卵する、雌雄同體であるから母體內で受精するのである、始め卵は鰓の外面に分泌せられたる、粘液質のもので保留せられて白色を呈する、是れをホワイト、スパットと云ふ、後灰色となつて漸次に黒色に變化して来る、是れをブラック、スパットと云ふ、此黒き部分は肝臓竝にアンボン(殻頂)の發育したる徴候であつて、雙殻が出来、活動する様になつて、母體より排出せられて附近の礫又は其他の附着物に固着し、始めて固着生活に移るものである、此間産卵後約三週間を要すると云ふ事である。

幼殻は圓形で固着部は扁平、上殻(蓋の方)は、滑かで渦脈を印し微細なる放射條紋がある。ナミマカシハの幼殻と能く似て居るが、ナミマカシハは附着部が肉柱であるから識別する事が出来る。

産卵期が上述の如く長期に涉つて居るから、發育の程度を測定する事は殆んど不可能であつて、一箇月間の初めに産卵せしものと末期に産卵せしものとは素より貝

の體質、産卵當時の水溫、潮流の關係、場所等によりて發育の程度に相異を生ずるので有るから、確然たる測定は一層困難を感じるもので有る、併しながら其大體を推定する事が出来ると思つて、左に測定表を掲載する事にした。

甲、イタホカキの貝殻に符號を印し海中に撒布せしもの

明石郡江井島に投入せるもの

大正五年八月五日投入同九月六日採取

幼殻の番號	高さ		長さ	
	(ミリメートル)		(ミリメートル)	
A、7	六、〇	六、〇	六、〇	六、〇
2	四、〇	四、〇	四、〇	四、〇
3	三、五	三、五	三、五	三、五
4	三、五	三、五	三、五	三、五
8	三、五	三、五	三、五	三、五
6	二、五	二、五	二、五	二、五
5	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇
B、7	六、五	六、五	六、五	六、五

明石郡二見に投入せるもの

1	4	3	6
二、三	二、五	三、〇	三、五
二、三	二、五	三、〇	三、五

大正五年八月三日投入同九月四日採取

C、

大正五年八月五日投入同十月八日採取

D、

乙、セメント、コンクリート製圓柱狀の附着器を使用せるもの

直徑四七五ミリ高さ一六〇ミリ中心に鐵製の把手を附す

大正五年八月五日投入同十月八日採取

發育良好のもの 徑 二二、〇 二〇、五 二〇、〇 一八、〇

普通のもの 一四、五 一一、五 一〇、〇

丙、貝鉤穿孔層(支那産淡水産貝)使用のもの

三原郡都志に投入せるもの

大正五年八月十日投入六年五月十二日採取

E、

3 三八、〇 三二、〇
1 三七、〇 三三、〇
2 二八、〇 二二、〇

大正五年八月十日投入六年十月七日採取

F、

1 七七、〇 六四、〇
2 七七、〇 七〇、〇
3 六八、〇 五八、〇

大正五年八月十日投入同七年二月二十三日採取

G、

1 七七、〇 七四、〇
2 六七、〇 七〇、〇

大正五年八月十日投入同八年八月八日採取

H、

1 九四、五 八四、三
2 八九、五 一〇二、〇

前表に據りて見れば發育力旺盛なるものはF號であつて、G號は比較的能力劣つて居るが、F號と同様に發育したのも有つた。要するに二ヶ年以上は貝殼の増大力は寧ろ減退し、唯貝殼の厚さを増加するからである。總じて陸上の動植物も貝類も發育力の速かなるは幼少期にあり、旺盛なるは青年期に屬し、漸次に體質のみを頑丈にするのは相同じである、これ實に造化の微妙であらねばならぬ。

貝類は外套膜より絶えず石灰質キチン質を分泌して貝殼を増大し、一定の期間に發育の階段を作り、雙殼にありては渦脈即ち生長輪線を劃する事明瞭である。

イタボカキの幼殼により一ヶ月間に十二線乃至十五線の渦脈を劃する事が略測定出來た、即ち隔日に一線を劃する割合である、併し冬期は分泌力著しく減退するが故に一の段階を生ずるのである。老成のものは前述の如く自然に分泌力衰退するから増大の伴はぬのは勿論である。

イタボカキの幼殼は圓形であるが、二ヶ月後は稍々橢圓形となり、五ヶ月後に稍角

張り、追々耳狀の突起を生じ、表皮の滑かなるものも漸く放射隆起を現はし、渦脈と交叉せる所は著しく突出し、漸次貝殼の増大と共に密集したる茸瓦狀を呈するに至り、後端突出し、最も完全に發育したるものは角張りたる巾着形を呈するのである。左殼の殼頂部は他物に固着し、他の部分は荒き放射隆起と所々に積が有る殼の内面は蒼白色を呈し眞珠光澤がある、又左殼は深く肉を藏し、肉柱痕は深く窪み、靱帯は内部に在り其兩背縁には細かき鋸目を印し、周縁はギザ／＼で啮合つて居る。老成したる貝殼及び潮流烈しき場所の貝殼は、耳狀突起磨滅して圓き巾着形を爲して居る。(圖版第五版)

イタボガキは千八百六十九年イー、エー、リシケ氏(H. A. Lischke.)が長崎産の標品により新種として發表したるものである。千葉縣以西、九州及び日本海沿岸の一部に分布し、海水の清澄なる所に棲む、多く石磯パラストに固着するが故に、コロビガキと云ふて居つた、土地によりコロレガキ、ババガヒなど稱して居る、主なる産地は左

の通りである。

千葉縣	上總水更津、安房船形、
愛知縣	三河渥美灣、伊良湖岬、尾張大野、
三重縣	伊勢白子、志摩答志、
和歌山縣	紀伊田邊、
兵庫縣	播磨二見、林崎、淡路郡志、
岡山縣	備中西大島、
廣島縣	安藝廣島、?
香川縣	讃岐高松、丸龜、多度津
愛媛縣	伊豫今治、波止濱、
福岡縣	有明灣、
長崎縣	肥前長崎、
福井縣	若狹和田、
石川縣	能登七尾、

イタボガキは三尋乃至十尋以内の礫地に産するが故に、廣島蠣を養殖するが如く、

簀^シを樹て、或は附着瓦を装置する事は困難である、我縣下では直径二寸未満の幼殻を漁獲する事を禁止し、所謂保護養殖の方法を採りつゝあり、其成績相當良好である。

イタボカキは又カキ(マガキ通稱廣島蠣)に比し、滋養素なるグリコーゲンの含有量多く、従つて一層滋養に富み、肉及肉柱共大きく西洋食用に好適である。彼の歐米人の嗜好するユーロツピアン、オイスターと稱する蠣に近く、將來在留外人間の嗜好に適し好評を博する事であらうと思ふ。幸ひ我播磨沿岸は饒産地であるから、明石蠣の通稱を冠する様になつたのである。

年 度	産 額		價 格	
	明石郡	加古郡	明石郡	加古郡
大正五年	九四、八五〇 ^圓	四六、六一五 ^圓	八、八六〇 ^円	四、三二五 ^円
大正六年	八五、七八〇	八二、四四〇	一〇、八七〇	五四、八八〇
大正七年	一二二、五五〇	二四、九〇〇	一七、三二〇	八、七一五

イタボカキの貝殻には多量の石灰分を含有するが故に、胡粉を製造するに用ひられ、圖案及工業用の優良品は蓋の方より、下等品は身(左殻)の方より作る。昔は胡粉を健胃劑として服用した、今尙ほ菓子に砂糖のツナギとして使用する。カキの貝殻は薄き故ペンキ代用品を製するに過ぎぬ。

イタボカキとカキとの對照に便ならしむる爲め比較表を示す事にした。

筒體	雌雄同體	雌雄異體
産卵	母體受精	海中にて受精す
棲息	潮流烈しき礫地	干満多き泥土地
貝殼	厚く大	薄く小
上殼	葺瓦狀の渦脈重る薄茶色	渦脈粗大末端反曲帶黄白色に黑色の三乃至五條の放射條を有す
下殼	放射隆と積あり稍深し	荒き隆角を有し深し
形狀	角張りたる又は圓き巾着形	多く三角形
肉體	稍堅く滋味あり	柔かく滋味なし

一 完全に發育したる貝殻
 二 老成したる左殻の外面
 三 同 左殻の内面



い た ぼ か き

利用

西洋食に好適

グリコーゲンを適出し薬品を製す
(グリコナール)

貝殻は胡粉、胃薬、菓子糖衣

和食に適す

グリコーゲンを薬用とす

貝殻はペンキ代用品

(大正九、二、一、兵庫教育)

とりがひ

攝州尼崎鳥貝 鳥貝といふもの昔はなかりしに、五六十年來尼崎の浦より出、其はじめは毒有さて人くはざりしが、二三十年このかたは、甚だ賞翫する事なれり。され共下品の貝なる故、貴人などの料理には用ふるこさなし。此貝を取には、かごあみを船のさもにつけて、船には帆をかけて風に隨ひはせゆく、籠網土砂と共に鳥貝をかき入れて取るなり。蜆蛤を取るに大がい同じ。

山海名物圖繪所載

とり貝は貝殻薄くして脆く、殆んど毬狀である、殻頂能く膨れ、表面は薄鼠色を帯びたる白茶色で光澤がある。四十餘條の放射線を有し、後端の數條を除きたる放射線には、一定の長さを有する剛き織毛を並列し、殻頂に近き部分は多く磨滅して居る。二或は三の生長輪線を刻して、中庸のものは高さ三寸一分、長さ三寸一分五厘、幅二寸五厘である。

ひがりと

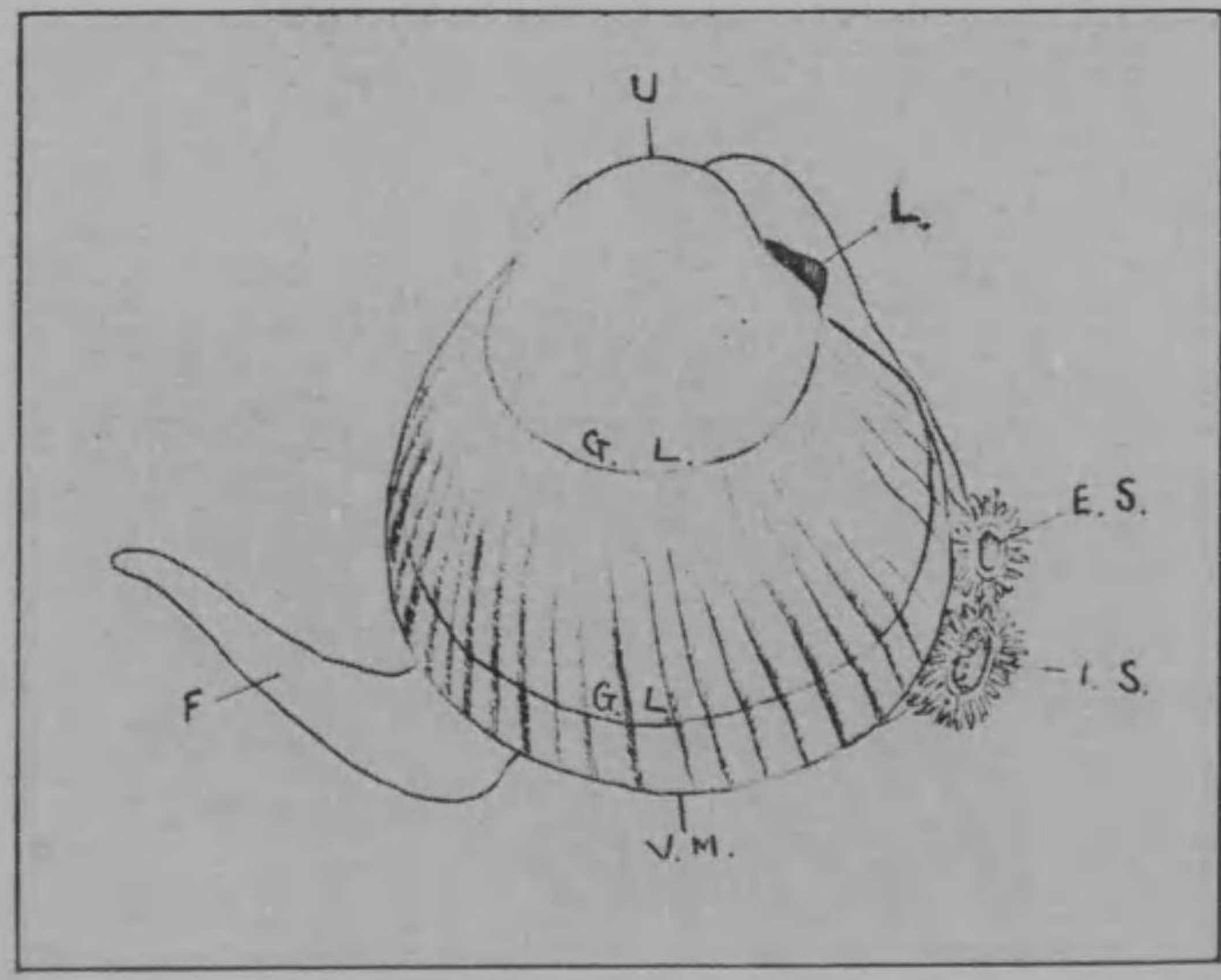
1 尼崎の鳥貝 (山海名物圖繪所載)



拾遺記云、鳥貝、攝州の鳥貝、其の殻、薄くして脆く、殆んど毬狀である、殻頂能く膨れ、表面は薄鼠色を帯びたる白茶色で光澤がある。四十餘條の放射線を有し、後端の數條を除きたる放射線には、一定の長さを有する剛き織毛を並列し、殻頂に近き部分は多く磨滅して居る。二或は三の生長輪線を刻して、中庸のものは高さ三寸一分、長さ三寸一分五厘、幅二寸五厘である。

矢倉貝類叢話圖版第六版

2 さりがひ



ES	IS	F	VM	GL	L	U
出水管	入水管	足	腹	生長輪	靱帶	殻頂

殻の内面は淡紅色を呈し甚だ美麗である。左右兩殻には、大小二個の鋭き主齒があり、前側齒は大きく薄き刃物状であるが、後側齒は甚だ小さい、外靱で有る肉柱痕は殆んど同形で、外套膜痕に灣入は無い。

足は最も能く發育し、長き圓筒狀の屈折したるくの字形である。烏貝の剝身は此足部を切截したものである。又外套膜の後端は漸く突出して出入管を構成し、管孔の周圍は細き菊花瓣狀を成せる突起物を附屬して居る。此脫離し易き肉柱と、外套膜縁との聯絡せるものは、俗にとりがひのひもと稱するものである。(圖版第六版二) とり貝は各地に廣く産するが、南海中央部の泥土地に、饒産し特に伊勢灣、知多灣及び大阪灣は主産地である。主なる産額を示せば左の如くである。

熱田沿岸

四四五、〇〇〇貫

知多灣

一一八、〇〇〇

伊勢灣

四一、〇〇〇

尼崎市

二一、〇〇〇

堺市

六、五〇〇

どりがひは箱鮓の具に能く用ふるので、婦女子の間にお馴染が深い。二杯酢、酢味噌等は上戸黨に悦ばれ、齒の強い人は干鳥貝を賞味する、とり貝の剝身は清潔であり一種の甘味を有するので、割合廣く賞翫されて居る。併しとり貝の貝殻を知る人が殆んど無いのは何故であらうか。夫れは此貝が蛤、淺喇等の如く何處でも取れると云ふ譯に行かないのと、雙殻が完全に密着しない爲に、早く貝が死ぬので、漁獲後直に剝身に處理する必要があるから、貝殻の儘市場に供給せらるゝ事が無い故である。

縣下尼崎のとり貝は、産額に於ては甚だ僅少ではあるが、古來有名であつて、彼の山海名物圖繪(寶曆四年版)に所載されたるが如く、現今に至るまで、尼崎とり貝の聲價を博し來たつたのである。同地の漁業者はすいのうと稱するドレッツチ風の桁

網を使用して居る。網は長さ四尺、一寸六分角の樫材の兩端に、高さ九寸の支柱を作り、其上部には樫材と同長の竹材を取附けたる枠に結附けられ、深さ二尋、底は結束してある。扱て樫材には長さ九寸、先端下方に灣曲したる鐵製の鈎針二十五本を配列して固定せしめ。兩支柱の前面には底徑五寸五分、上徑四寸、高さ六寸の圓錐形を爲せる花崗石製の重錘を縛し、重錘の結束前部の中央には棕櫚繩の把手を結び附け、網口をして相當の俯角を保たしむる爲に、把手と竹管とを藁繩にて連結し更に長さ四尋の繩を兩把手に取附け、此繩の中央には長さ二十五尋の太綱を結び附け、其端は漁船の舷側に取附ける。小型の漁船は綱六條、大型の漁船には八條を取附け、風力を利用し打たせ網と同方法で漁獲するのである。

漁期は大抵八月より翌年の四月に至る迄あるが、二月より四月に至る間は、とり貝の發育最も良好な時季であつて能く肉肥ね美味であるといふことである。

(大正一〇、二、一、兵庫教育)

貝塚の貝類と貝製作品に就て

先史時代、即ち有史以前——神武天皇即位紀元以前の古き昔——の住民、所謂我
先住民は未だ金属を知らず、石器(石礮^{矢の根石}、石鋸、石匙^{天狗之飯匙}、石斧^{雷斧}、石棒等)及
土器(縄紋土器、アイノ式土器、彌生式土器)を使用し、殆んど原始的な生活をして居
つたが、決して無智蒙昧の徒で無かつたものと思はれる、彼等の石器製作に卓越せ
る技術は土器及獸骨、角等を利用したる銛、鉤針等にも裝飾的彫刻を施し、勾玉、
玉類の装身具をも製作し、彼の愛らしき石礮の精巧なる技術に至りては感賞を禁じ
得ないのである。此石礮は武器の外賞玩用とし或は贈答に若しくは交換に通貨の如
く流用されたものであらうとは、二十餘年前土佐の古錢大家、故今井貞吉氏の唱道せ
られた所であつて、著者も其説には賛成を表したのである。何となれば此微小な

る石礮は殆んど武器に適せず、寧ろ愛玩用としての素質を有して居るからである。
扱て此の如き石器及土器を多く使用したる時代を石器時代と云ひ、石器時代を舊石
器及新石器時代に區別する。我日本は新石器時代に屬するのである。

此石器時代住民生活の状態は、有史以前の事に屬するから確實なる事蹟を調査す
るのは不可能である。唯彼等の遺蹟に就きて得たる遺物、人骨等に基づき、醫學、
人類學、考古學上の見地より比較研究し、以て數千年前に於ける彼等の人種的生活
状態を推定し得るのである。此蹟跡地を四種に大別し、

- 一、遺物散列地 遺物が地上に撒布せられ、即ち風雨の爲に遺物が自から地上
に露出し、容易に拾得し得る所
- 二、遺物包含地 遺物が年代の久しき間に自然に土中に埋没したる所
- 三、貝塚 石器時代住民の住居地である、彼等の食料とせし貝殻、獸骨、竝に
土器等を遺棄せし所

四、堅穴 地中に穴を掘り、屋根を作り彼等の住居せし所、北海道に多く發見

せられて居る

日本石器時代人民遺物發見地名表(第四版大正六年十二月東京帝國大學發行)に據れば全國及樺太、臺灣を合して遺蹟地五千二百五十八箇所の多きに達して居る、内貝塚は四百五十六箇所である。分布地は左表の通りである。(但し正確は期し難い)

北海道	一五	陸奥	九	陸中	二	陸前	二二
磐城	九	羽後	一	佐渡	二	越後	二
越中	一	越前	一	加賀	一	常陸	七〇
上總	一四	下總	九九	安房	二	武藏	一三一
相模	九	遠江	七	三河	七	尾張	六
紀伊	一	伊勢	一	播磨	一	備前	三
備中	五	備後	一	但馬	一	筑前	三
筑後	三	肥後	一〇	日向	二	大隅	二
薩摩	一	琉球	五	臺灣	四	樺太	三

抑も貝塚は介墟とも書し、英語の Shell mound の譯語である。明治十二年大學の御雇教師米國人エドワード、シイルヴエスター、モールス氏が東京市外大森に於て始めて貝塚を發見し、後年幾多の諸學者により研究せられ、考古學今日の隆盛を來たしたのである。貝塚は多く丘の中腹、若くは平野の稍高所に在り、海濱に接し或は海濱に近き所であつて、往々里餘を隔てる處も有る。貝塚は彼等の住居地であるから海濱に近き所では有らねばならぬ、左れば此貝塚と現代の海岸との隔りは、石器時代と現代との陸地の變遷即ち退潮を立證するものである。又貝塚に包含せる貝と現生種との比較研究により、石器時代と現代との種の變化、分布の状態を知る上に於て、乃至石器は其地方に産出するものを使用せるものなるが故に(大部分は)石質に據る自から民族的地方型式を供へ、懸て土器の彫刻様式にも此特長を表はして居るのであるから、此貝塚の遺物と他の貝塚相互間の遺物比較或は貝塚と遺物包含地との比較研究に關聯して多大なる資料を與へるのである。

二九、岡山	備中	都窪郡	帶江	有城貝塚
三〇、同	同	同	同	羽島貝塚
三一、同	同	同	同	羽島上光寺
三二、同	同	同	同	東粒江貝塚
三三、同	同	同	菅生	菅生貝塚
△三四、同	同	浅口郡	西大島	津雲貝塚
三五、同	同	同	玉島	柏島貝塚
三六、廣島	備後	深安郡	引野	大門貝塚
三七、三重	伊勢	桑名郡	桑名	彌塚貝塚
三八、福井	越前	丹生郡	西安居	北堀貝塚
△三九、京都	丹後	熊野郡	湊	函石貝塚
四〇、兵庫	但馬	城崎郡	新田	中ノ谷貝塚
四一、福岡	豊前	京都郡	黒田	大野貝塚
四二、熊本	肥後	八代郡	吉野	宮ノ庄貝塚
四三、同	同	宇土郡	轟	大貫貝塚
四四、宮崎	日向	東臼杵郡	南方	大貫貝塚

四五、同	同	同	柏田	荻堂貝塚
四六、沖繩	琉球	中頭郡	中城	伊波
四七、同	同	同	美里	伊波
四八、臺灣	臺北	同	大龍洞	圓山公園

以上四十八箇所

- 1、一部は京大藏品による
- 2、京大藏品による
- 3、大森介壺古物篇による
- 4、本山彦一氏藏品による

△、有名なる重要貝塚

一、吹浦一本松貝塚

二四、姫路千代田町貝塚

三八、越前北堀貝塚

四〇、但馬中ノ谷貝塚

近年の發見に係り地方的有力の貝塚

六、宮戸島貝塚

三四、津雲貝塚

近年人骨及土器、貝製作品の發見により學界に重きを爲せる貝塚である。

貝殻の種名及び分布一覽

一、はまぐり 二十三ヶ所

西ヶ原、王寺、但馬、西安寺、有城、姫路、鳴神、伊勢、宮戸、蜆塚、田中森、琉球、伊波、玉島、羽島、上光寺、大貫、熱田、西貝、津雲、大門、大森、轟

二、かき 二十ヶ所

西ヶ原、大船渡、瀬澤、宮戸、田端、大森、

伊勢、鳴神、三河、熱田、刈谷、但馬、羽島
 大門、津雲、柏田、大貫、轟、黒田、吉野
 三、しどみ 十八ヶ所
 王寺、田端、中泉、蜷塚、三河、吹浦、但馬
 函石、津雲、北堀、鳴神、中瀬津、豊原、柏田
 大貫、西貝、沼田、臺北
 四、はひがひ 十六ヶ所
 王寺、中泉、大森、但馬、西安寺、藤戸、羽島
 津雲、大門、鳴神、豊原、柏田、刈谷、轟、
 吉野
 五、おきしどみ 十四ヶ所
 細浦、宮戸、王寺、大森、中泉、西ヶ原、但馬
 鳴神、姫路、熱田、羽島、津雲、大門、琉球
 六、あさり 九ヶ所
 細浦、瀬澤、二日市、蜷塚、王寺、宮戸、大森
 姫路、津雲

七、さるぼう 十一ヶ所
 宮戸、余山、権現臺、大森、西ヶ原、王寺、
 但馬、熱田、玉島、津雲、轟
 八、かみかひ 七ヶ所
 権現臺、大森、鳴神、姫路、津雲、大門、轟
 九、いたばがき 八ヶ所
 堀ノ内、権現臺、大森、余山、熱田、函石、
 津雲、轟
 一〇、あかひ 四ヶ所
 細浦、大船渡、末吉、権現臺
 一一、おきあさり 三ヶ所
 蜷塚、函石、鳴神
 一二、こたまがひ 三ヶ所
 吹浦、二日市、西貝
 一三、みるくひ 三ヶ所
 細浦、大森、蜷塚

一四、うちむらさき 四ヶ所
 宮戸、細浦、大船渡、津雲
 一五、おほのがひ 六ヶ所
 細浦、二日市、宮戸、王寺、西ヶ原、大森
 一六、べんけいがひ 二ヶ所
 余山、西貝
 一七、まるさるぼう(あかひの一種)
 余山
 一八、あかひの一種
 津雲
 一九、うらかどみ
 姫路
 二〇、しほふき 五ヶ所
 二日市、宮戸、王寺、熱田、姫路
 二一、ばかひ
 吹浦

二二、いがひ
 吹浦、宮戸
 二三、むらさきいんこ
 吹浦
 二四、かりがねがひ
 宮戸
 二五、いそしどみ
 二日市、大船渡
 二六、おにあさり
 細浦、津雲
 二七、けまんがひ
 津雲
 二八、いたやがひ
 津雲
 二九、ねがひ
 琉球、伊波

三〇、しらながひ

琉球

三一、くつがき

余山

三二、ちりぼたん

琉球

三三、あこやがひ

琉球

三四、うばがひ

大船渡

三五、ほたてがひ

細浦、瀬澤、大船渡

三六、いそはまぐり

伊波

三七、しやこ

琉球、伊波

三八、ひめしやこ

琉球

三九、さどろきがひ

伊波

四〇、くろてうがひ

琉球、伊波

四一、しゆもくあふりがひ

琉球

四二、いなみがひ

琉球

四三、りうきうさるぼう

琉球、伊波

四四、かわらがひ

琉球

四五、ゆふかけはまぐり

琉球

四六、りうきうなみのこ

琉球

四七、すみのねがき

琉球

四八、りうきうひばりがひ

琉球

四九、めんがひ

琉球

五〇、しれなしどみ

琉球

以上五十種は雙殻類、(二枚貝)なり

内 三、五〇の兩種は淡水産

三四、五三は東北地方特産の貝

三六、以下は琉球特産の貝

五一、あかにし 二十ヶ所

細浦、大船渡、宮戸、権現臺、王寺、西ヶ原

刈谷、熱田、蛭塚、鳴神、但馬、羽島、大門

津雲、西安寺、大森

五二、いぼにし 八ヶ所

細浦、二日市、吹浦、大森、△刈谷、但馬

△大門、津雲

△は變種

五三、つめたがひ 九ヶ所

細浦、大船渡、田端、大森、宮戸、△刈谷

△津雲、大門、轟

△は變種

五四、すがひ 五ヶ所

細浦、宮戸、大森、津雲、大門

五五、うみにな 五ヶ所

細浦、宮戸、刈谷、大門、津雲

五六、れいし 五ヶ所

細浦、二日市、宮戸、羽島、津雲

五七、くぼがひ

細浦、宮戸

五八、きさご

蜷塚

五九、こしたかかんがら

細浦、二日市、宮戸

六〇、たまきび

王寺

六一、いしだ、み

二日市

六二、ばていら

細浦

六三、いそたまがひ

細浦

六四、しごろ

津雲

六五、いほうみにな

津雲

六六、てんぐにし

大森、津雲、轟

六七、ながにし

大森

六八、ごまふだま(へそくり)

津雲

六九、おほへびがひ

細浦、大門、津雲

七〇、ふさへなたり

刈谷、津雲

七一、さゞね

熱田、津雲

七二、さらだま

琉球

七三、ばい

大森、轟

七四、かはにな

吹浦、琉球

七五、レベツキかはにな

琉球

七六、おほたにし

函石

七七、かくたにし

吹浦

七八、いそあはび

宮戸、余山

七九、ひめいそぼら

細浦、瀬澤、宮戸

八〇、ひれがひ

細浦、二日市

八一、ちゞみぼら

瀬澤、二日市

八二、やうらくがひ

伊波

八三、いそまきぼら

琉球

八四、むかしたもこ

同

八五、すいしやうがひ

同

八六、さらさみなし

同

八七、おはぐろがひ

同

八八、にしきうづ

同

八九、リうてん

同

九〇、すいじがひ

同

九一、かんぎく

同

九二、くもがひ

同

九三、くちむらさきたから

同

九四、ほしたから

同

九五、ほらがひ

同

九六、たいわんばい

同

九七、おきなはやまたにじ(陸産)

琉球

九八、つやきせる(陸産)

同

九九、しゆりまいく(陸産)

同

一〇〇、ユーロタ?(陸産)

同

一〇一、うしのつめ

同

一〇二、やまたにじ(陸産)

同

以上五十二種は單殻類II(螺類又は巻貝)なり

内 七四―七七の四種は淡水産

九七―一〇〇、一〇二の五種は陸産

七七―八一の五種は東北地方特産の貝

八二、(一〇一、一〇二を除く)以下は琉球特産の貝

以上貝塚の内包含種数の多きものを順位左に

示す。

琉球萩堂貝塚 三十四種 (東大報告書)

備中津雲貝塚 二十九種 (著者の入手せる数)

陸前細浦貝塚 二十種 (同上)

同宮戸島貝塚 二十種 (同上)

同二日市貝塚 十一種 (同上)

備後大門貝塚 十一種 (同上)

肥後轟貝塚 十一種 (京大報告)

武蔵王寺貝塚 十種 (著者の入手せる数)

以下略す

貝塚の包含貝殻の種類はハマグリ最も多く、二十三ヶ所、次でカキ、アカニシの各二十ヶ所、シヅミ十八ヶ所、ハヒガヒ十六ヶ所、オキシヅミ十四ヶ所、サルボウ十一ヶ所、アサリ、ツメタガヒの各九ヶ所で巻貝に其数尠きは採集の困難にも依つた事と考へられる、而して以上の九種は最も廣く繁殖して居つた事が知られる、つまり貝塚の代表種である、又貝塚の貝類と現生種とを比較するに少しも異つた事が無い、概して能く發育し特にカキが現代の養殖種よりも遙かに大きく、しづみの形態に著しく變化を認める(しづみの研究は他日の發表に譲る)のと、ハヒガヒの殻が甚

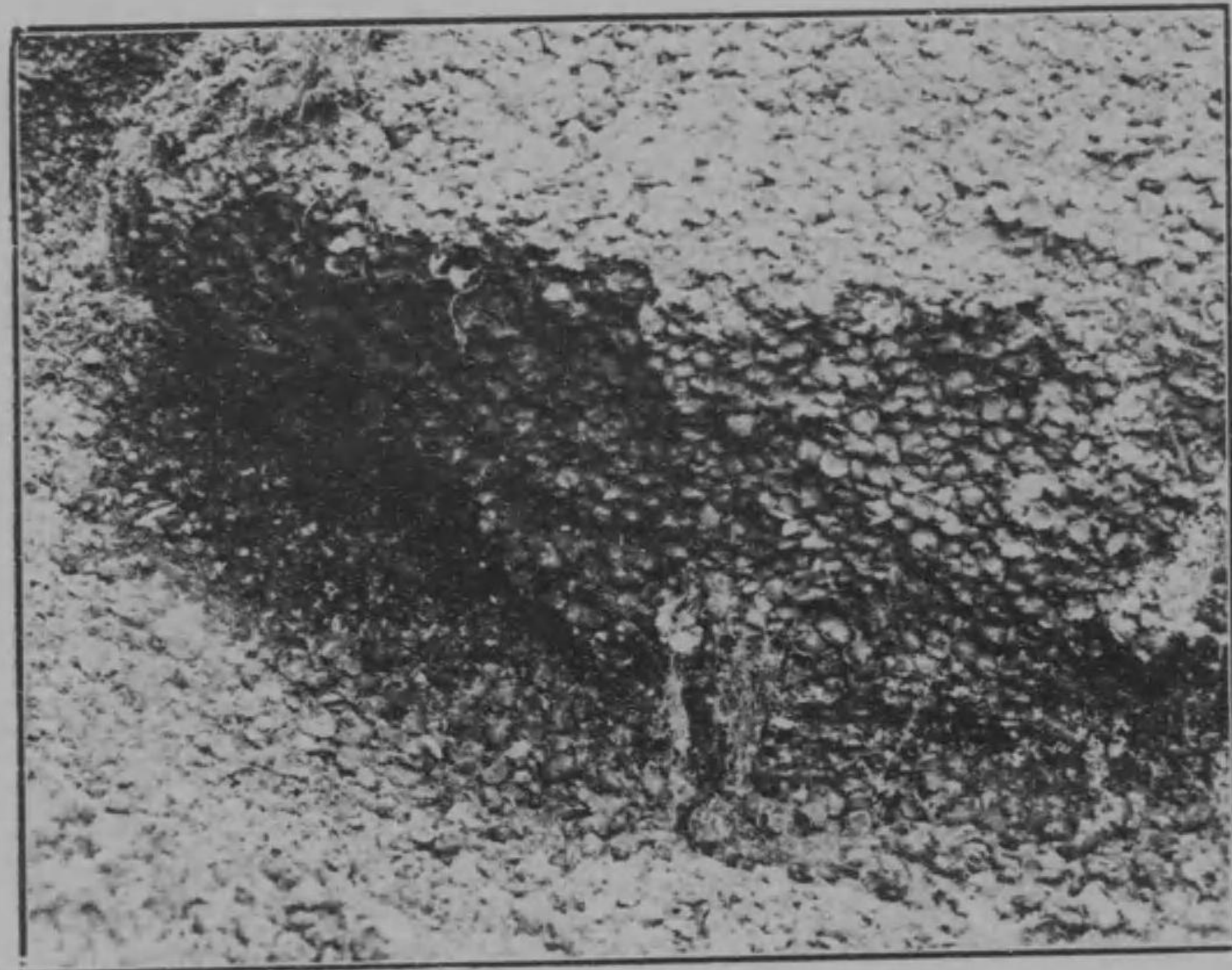
頑丈で概して大きく、殻頂突出し隆起結節の粗大なる等は、左の圖版を見て略ぼ推察する事が出来ると思ふ。(圖版第七版二)

次に貝の製作品で從來知られたのは貝輪である、貝輪は關東及東北地方の貝塚より數々發見せられた事が有つた、アカバヒ、マルサルボウ(アカガヒの一種)ベンケイガヒの三種及びイタボガキの右殻に穿孔したるもの、アカニシの半製品と覺ぼしきものを發掘したが何れも粗造品であつた。大正七年三月大阪醫大の大串博士が津雲貝塚發掘に際し、人體の兩膊骨にあかゞひの一種(前記のものとは異なる種類)を研磨して精巧に作れる腕輪を左腕に左殻を、右腕に右殻を挿入せるものを發見した、(現品は本山彦一氏所藏、著者も破片數個を藏す)次で大正八年九月京大清野博士の發掘により、又亦腕輪を挿入せる人骨多數を得、特に珍とすべきは右腕に七個、左腕に八個の腕輪を挿入する人骨を發掘せられ、尙清野博士は肥後縣貝塚に於て人骨と共にサルボウ製の腕輪一雙を得られた(京大報告書)、以上記述したるが如く發掘

地によりて精粗あり且つ貝の種類にも地方的特産なる事を首肯する事が出来る。攝津加茂(阪鶴線池田驛の南方)の遺蹟より田澤君の採集したる、ユキノカサガヒ(ヨメガ、サの一種)の小形貝輪がある、此貝は日本海、東北地方、北海道及び朝鮮の東南岸に産する貝である。分布上他方面より傳來したものと察せられる。又羽後河邊郡四ツ小屋の遺蹟より發見したる貝の勾玉は石器時代の末期に製作したもので全く類例の無い珍品である。(著者所藏)貝は大なる夜光貝(琉球、臺灣及び南洋に産する貝)の殻軸で作つたもので、支那大陸を経て傳來したものであらうと察する。陸前細浦貝塚の遺物にベンケイガヒの腹縁を半月形に研磨し、兩端に穿孔したる裝身具がある、發掘數は甚だ尠ない。大正八年東大松村瞭氏の琉球、萩、堂貝塚遺物中に貝製の皿、匙、ナイフ、及貝輪がある、前記津雲貝塚の腕輪と共に南洋的色彩を帯びた珍品である。

貝塚は通例一尺乃至三尺の包含層を爲し、必ず石器、土器、獸骨、牙、角或は其

貝塚の貝



但馬城崎郡新村田中貝塚層の一部 1

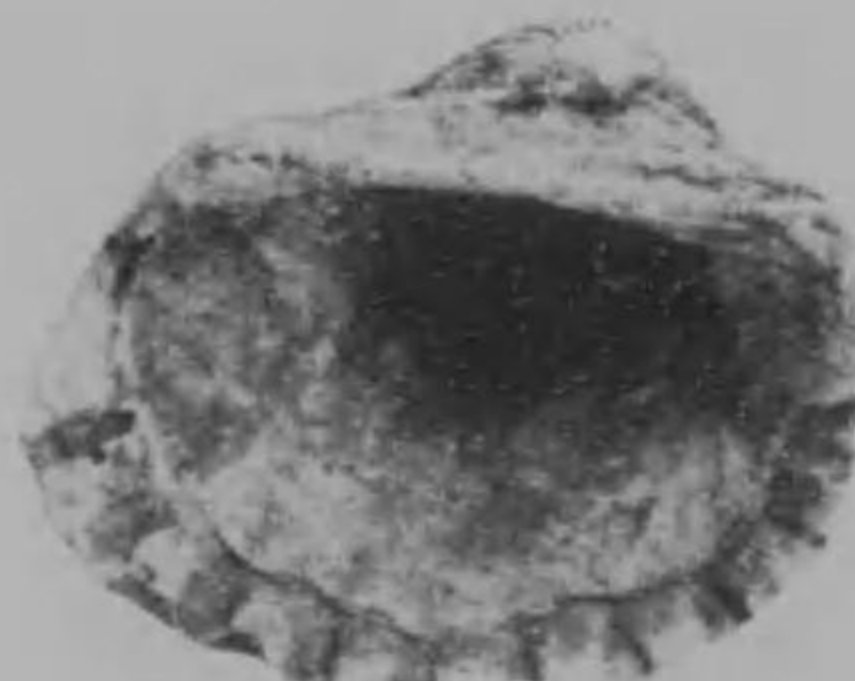
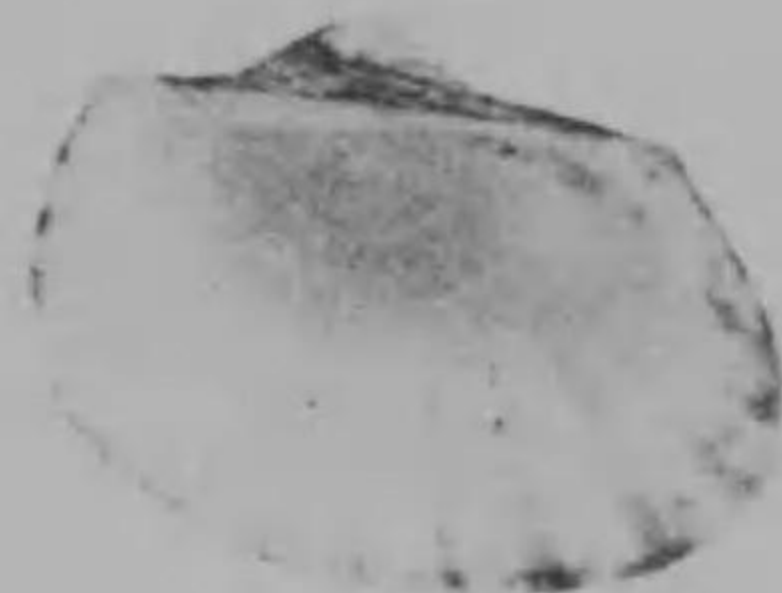
矢倉―貝類叢話圖版―第七版



現生のひがひ



2 貝塚のひがひ



製作品の何れかを伴ふものである。往々數尺の厚き貝層を爲す場合もある。(但馬中ノ谷貝塚は蜆の密接したる五六尺の貝層であつた) 又著しき退潮の爲めに、地下に多數の貝殻を埋没したるを發掘する事がある、但馬豊岡町附近より城崎に至る地下は即ち夫れである。又近年飾磨郡四郷村明田の地下貝層は多分此種のものであらうと察する。

最近發見品追加

オホツタノハの腕輪(余山貝塚京大藏品) チリボタンの長さ一寸九分、幅七分弱の半月形に磨きたる廣き部分は欠損し、尖端に近き處に此缺損部の端に偏したる處に穿孔したる用途不明の貝器(薩摩出水郡出水町小字尾崎貝塚京大藏品)

(大正二〇、四、一、兵庫教育)

「たこ」と「いか」

蛸と烏賊とは寧ろ魚類として能く知られ、蛸の活動振の面白き、蛸入道なる代名詞の滑稽的なる、兒童間にも御馴染の深い奴である、蛸配當なる經濟上の譬喩も、彼等の貪食性を推知する事が出来る。實際飢ゐたる時は同類間の鬭争もやる、常に漁場の魚類を荒らし、牡蠣の養殖場は彼等の爲めに損害を受けつゝある、先年志摩の真球貝養殖場に於て、蛸大群の襲撃を受け、無数の真球貝を食はれ大損害を被つたのは有名な事である、中々厄介な奴である。併し食用としては相當に役に立つ、形態の醜惡なる爲め高等の調理には用ひられぬが、嗜好せらるゝ事は多い、縣の産額のみにも一ヶ年貳拾萬圓を超過して居る。

烏賊は蛸に比し味數等上品であるから。高尚なる調理に用ひられ、特に鰯は神饌、

祝事に缺くべからざるものとして賞用せられて居る。歐米人は蛸及烏賊は劣等なるものとして得食はぬ。總して東洋人は貝類を能く食ふ人種である。

蛸及烏賊は軟體動物中の高級なる頭足類に屬し、柔かき胴と脚とより成り、胴には大なる眼と噴水管とあり、二個の鰓と一個の墨汁嚢を藏し、烏賊には甲が有る、脚の基部中央には口あり、鋭き一對の顎即ち俗にいふからすとことんびとあり、口の内には他の貝類と同じく齒舌がある、是れ即ち蛸及烏賊が軟體動物に屬する所以である。

蛸を大別して貝殻のなきものと、貝殻を有するものに分ける、貝殻のなきものは、マダコ、イヒダコ、アシナガダコ、フクロダコである、フクロダコと云ふのは、胴と脚との區別なく脚の殆んど先端まで薄膜を被むり、眼の背後に小さき肉鰭あり、噴水管は短かい、而して脚の吸盤は一列しか無い深海産で相模沖に棲息して居る、奇態な一種の蛸である。

最も普通に産するのはマダコである、交接して七八月の交産卵する、卵は細絲狀、膠物質の周圍に葡萄の如く密集して居る、卵の直径漸く一、二五ミメ、長徑二、二五ミメの卵圓形を爲し、三〇乃至三二ミメの柄を附し、一房の長さ五〇乃至一〇〇ミメ、一房に附着せる卵の数は四百乃至六百を算す、此の如き多數の卵も、多くは自然淘汰の爲に死滅し、其一部分のみ發育して第二の蛸入道となる譯である。

大正五年十月二日測定したる卵は一房の長さ五十三ミメのものに附着せる卵の數三百九十五個、七十六ミメのもの四百二十五個、九十ミメのものに五百六十個あり、房の長さ五十三ミメ一。七十六ミメ三。八十一ミメ一。七十九ミメ二。八十五ミメ一。八十八ミメ二。九十ミメ二。平均八十八ミメ卵の數平均四百七十個で有つた。

此幼卵は海藤花と云つて好事家の賞味するものである、用法は鹽漬と爲し貯藏し置き必要に應じ取り出して水洗し、二杯酢又は吸物と爲して食す、只珍物として好事家に賞翫されるに過ぎぬ。

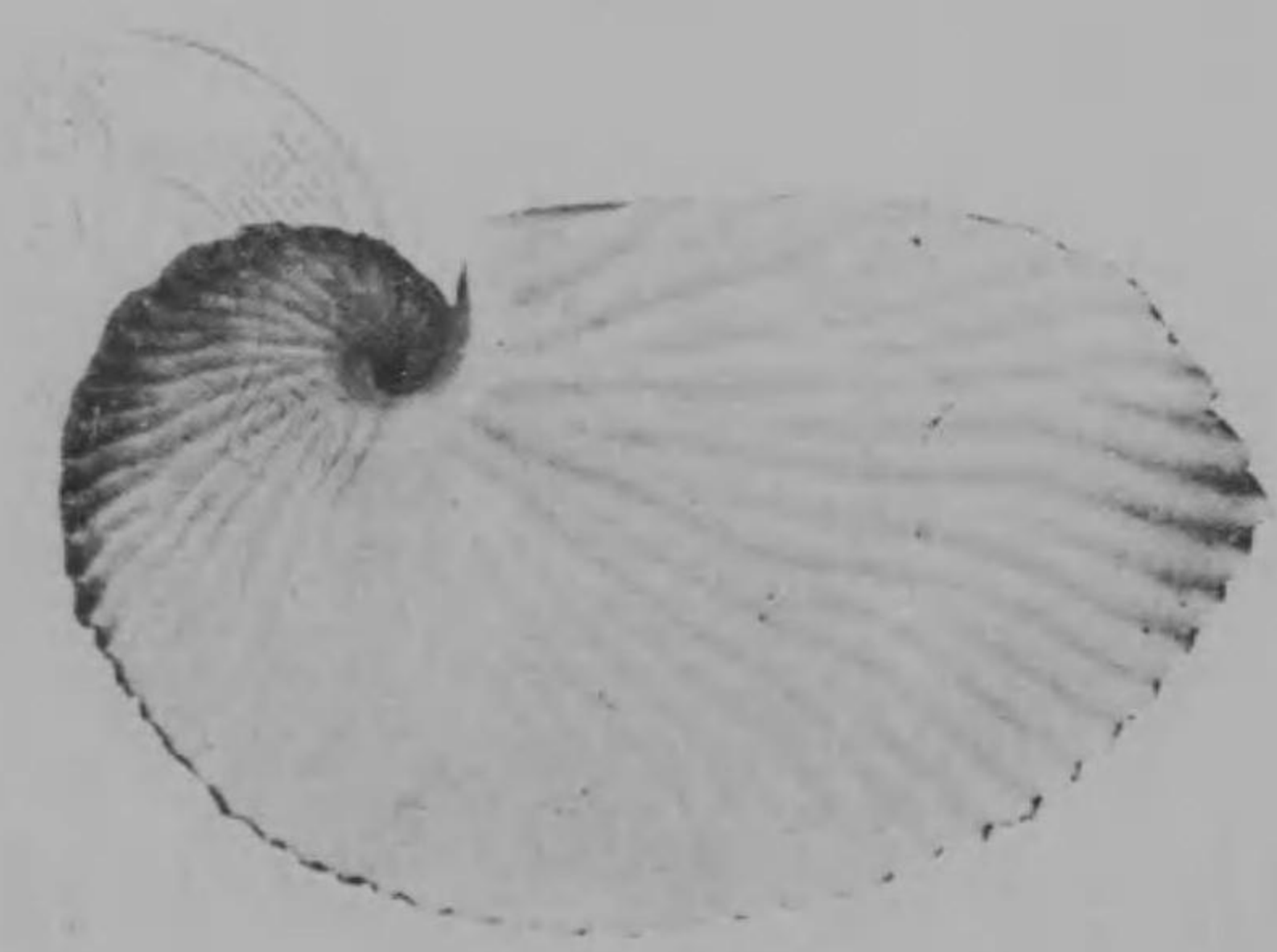
飯蛸は蛸より柔かであるが味は劣る、二三月の交産卵する、多くは貝殻などの凹所に産卵し、母體は卵の成熟する迄是れを保護して居る、蛸より産卵数は尠い、大抵百五六十個である、大正二年七月九日採集したる熟卵は長徑十三四ミメを有し、幼體の蠢動せるを見た、幼體の口には小囊を附着して居る、是れは哺乳動物に於ける胎盤と同様の作用を爲すものであらう、却説見る々々孵化したる幼體は盛に飛躍を試みて居る、或者は暫らくにして斃死するものも有るが其の内幾分の幼體は生育して飯蛸の系統を相續して行くので有る。

貝殻を有するものとはタコブネ、アフヒガヒの二種であつて、雌の方にのみ角素質、セルロイド状の半透明なる貝殻を分泌するのである、殻は荒く螺旋したる左右相稱であつて、殻口は廣く大きい、タコブネの方は徑三寸内外、鼠色の地に荒き放射状の隆起あり、龍骨の兩角には荒き疣々がある、アフヒガヒの方は徑八九寸に餘るものがある、純白で隆起は稍密で、丁度葵の葉に能く似て居る、龍角の幅狭く疣

た
こ
と
い
か



1 たこぶね



2 あふひがひ

々も密である。

動物の頭部は螺旋部に有るから曲つて居るのと前二脚に蹠狀薄膜が有つて貝殻を包み、體の脱出と貝殻の破損とを防ぐ様に出來て居るのが蛸と異つた點である。

雄には貝殻なく且つ小さく雌の約十分一である、交接期には右の第三脚は變形して交接の用を爲す、千葉縣以西及日本海の中中部迄分布し總て外海に棲む。

(圖版第八版)

烏賊は胴長く周縁に二枚の肉鰭がある脚は短かく二本の觸脚を持つ、眼球の表面に薄膜の掩ふたるものを閉眼と云ひ、之れなきものを開眼と云ふ、又胴には石灰質又は薄き角質の貝殻即ち甲を持つて居る。烏賊には大小の變化多く、胴及貝殻の大小、脚及觸脚の長短、吸盤の構造配列等によりて區分されて居るので、其測定法と主要なる數種の烏賊に就ての概説を掲げ此稿を終る事とする。

胴の貝殻が附着せる方を背とし、反對の方は腹とし、頭の尖端は後ろとなる脚の

先端が前であるから背面から脚の先端に向つて中央より、右又は左へ第一脚二、三、四と順次に數へる、即ち單に四、三、二、一と云へば左右共第四脚第三脚第二脚第一脚の事である、附加へて置くが烏賊の脚は同順位のものとは左右同長である、又吸盤には柄があり、其口縁には角質環に大抵鋭き刺齒の有るのを持つて居る。



ヤリイカ 長大にして全長二尺に餘るものがある、胴は細長く、肉鰭は菱形で胴の半分より稍長い、羽毛状の透明なる貝殻あり、閉眼である、脚は短く三、二、四一又は三、二、一、四である、觸脚は長く殆ど胴長に等しく吸盤大きく四列である。乾燥したるものは一番鰭と云ひ、鰭中の最も美味なるものである。

カフイカ類、マイカと稱し最も廣く産するものである、石灰の貝殻を持ち、胴の後端より貝殻の刺先の突出して居るのをハリイカ屬とし、只小孔のみを穿つものを

ハリナシカフイカ屬とす。

カフイカ 胴は長楕圓形で大きい方である。鰭は胴の全長に沿ひ石灰質の厚き樹葉状の貝殻がある、貝殻の背は粗糙で、腹面の正中線は窪み、後端に圓錐状の室を抱き鋭刺が有る、脚は胴長の六分四に等しく觸脚は長く胴の一倍半に達して居る、四、一、二、三又は四、一、三、二である。

ハリイカ屬の中に *Sepia Kobensis*, *S. Kiiensis*. 及び小形なるものがある、胴長は漸く二寸五分乃至三寸脚は短く觸脚、前者は脚より稍長く後者は胴の約二倍ある、貝殻は細く柳葉状の石灰質で有つて、後端の圓錐状の室は退化し小盃状となつて刺は鋭い、脚の順序は前者第二脚が他脚より稍長い、後者は一、四、二、三又は一、四、三二である、市場でヒシボと稱するもの即ち此種類である。

ハリナシカフイカ カフイカより小形、頭の後端に小孔を穿てるのみ、貝殻は石灰質で正中線に溝無きと後端に刺なく薄盤状に廣がつて居るのが違ふ。

アオリイカ

鳥賊屬中の最大なるものである、全長間々三尺を超ゆるものが有る、

胴は椎實形で鰭は胴の全長に沿ひ幅廣く角質の貝殻はヤリイカより幅廣い。

脚は三、四、二、一で有つて、觸脚は胴長より長く脚頭は其約三分一有つて吸盤は四縦列で角ある杯形である。

ミ、イカ

胴は漸く鶏卵大にて鰭は中央部に在つて圓い、頭は胴と連絡し、脚は胴より稍長く觸脚は其約二倍ありて、少しく鈎状を爲し無數の小吸盤がある。

以上は閉眼類に屬し、以下の三種は開眼類である。

スルメイカ

ヤリイカに似て稍小さく、肉鰭が後端に接し三角形を爲して居ること、觸脚がヤリイカよりは短く吸盤は二列である、七八月の交産卵す、乾燥したるものは二番鰭である、

ホタルイカ

越中滑川附近に産する愛らしき鳥賊の一種で發光するを以て有名なものである、螢の發光研究を以て有名なる渡瀨理學博士の研究によりホタルイカな

る名を冠せられ且 *Watasenia* なる新屬を設定せられたるものである、

胴長は漸く一寸五分乃至二寸に餘り、肉鰭は廣く突出し、胴長の約三分二あり、略四角形を爲して居る、貝殻は角質羽毛状である、脚は胴の約二分一にて第四脚は稍長く末端に各三個の球状發光體が有る、其他胴、頭の腹面、漏斗の腹兩側には無數の發光體を有し、且第三、四脚にも同様散在し、其數 雌に在りては五百七十乃至六百八十五個、雄に在りては四百五十乃至五百四十個を有すと云ふ、光色は紫を加へたる藍青色で殊に脚部のもの強力にて甚だ美觀を呈すと云ふ。

スピルラ

太平洋中部及び亞米利加東海岸に産する小形の鳥賊にて全長約二寸五分、胴は圓筒状を爲し、脚甚だ短かく、胴の後端には翼状の小肉鰭があつて、胴の後端開口して體內には半透明乳白色を爲せる經約六ミメ、旋回せる恰もアムガヒの殻の如き銀色の光澤ありて、内方に窪める隔壁の内端、即ち貝殻の旋回内壁に接したる部分には小孔を穿ち細管を通じて隔壁を連絡して居るのはアムガヒと同様

である、従来貝殻のみは数々採集せられたが、生體の捕獲せられたるもの僅に六個を算するに過ぎぬと云ふ珍稀なる鳥賊である。

(大正九、四、一、兵庫教育)

巻貝と二枚貝

巻貝又單殻類(雙殻類に對して)螺類共稱す、殻軸を中心とし旋回せる螺層を有し、螺層には蝸牛の如く脆弱なるもの、榮螺の如く堅固なるものあり、普通右卷なり殻口には多く厝を有し、此厝にも榮螺の如く石灰質の堅固なるもの、田螺の如く角質のものツメタカヒの如く膠質のものあり、異形多く動物體を保護し外敵の侵害を防禦す。

左卷は其種數甚だ尠く、右卷の貝にして往々左卷に變化する事あり、此場合動物は右卷にして殻畸形を爲せるを常とす、米國フルグアーセルは左卷として有名なり。印度人は宗教上の習慣として左巻貝を崇敬し、トラバンコール(印度南方)の國章たり、且つ聖螺と爲せる、シャンク貝の左卷となれるものは珍中の珍品にして、靈

威あるものと爲し、同量の黄金よりも尊しと云へり、左巻貝の世界を通じて僅少な
るを知るべし。

螺層の旋回多きものは殻形球狀(榮螺蝸牛等)圓錐形(更紗馬蹄通稱田螺等)紡錘
狀(長螺、法螺貝等)を爲し、旋回少きものは扁平なるか或は螺塔低く、殻口郭大し
て唇を有せず(鮑、モノアラガヒ等)。

巻貝は陸産(蝸牛類)の全部、淡水産(田螺カハナ、モノアラガヒ等)及び海産貝
類の大部分を占む。貝殻の形態、鰓の構造、齒舌の形式、生殖器の解剖的研究に基
き、楯鰓目(梁舌亞目笠貝類、扇舌亞目鮑、榮螺等)楯鰓目(紐舌亞目田螺〔有陸産〕
狭舌亞目長螺、赤螺、寶貝等)後鰓目(被鰓亞目、裸鰓亞目)有肺目(有柄眼亞目蝸
牛類、無柄眼亞目モノアラガヒ、菊花貝類〔海産〕等)の四目に區別せらる。

動物は判然なる頭部に眼、觸角、口を有し、發達せる足を以て匍匐し、齒舌を出
して植物性(植物の葉、海藻)或は動物性(昆虫、魚肉、貝類の肉)の食餌を咀嚼す、

前者は蝸牛等、鮑、榮螺の類、後者は有陸産、法螺貝、赤螺等の類之れに屬す。

生殖器は雌雄同體なると異體なるとあり、交接して産卵す。アメフラシの卵塊は素
麵狀の管中に無数の卵囊を含み、卵囊中には又多數の卵を藏す、其數恐らく數萬個
を計上するを得べきならん、テングニシの海酸漿、アカニシの長刀酸漿コロモガヒ
のチャン／＼酸漿、長螺のさかさ酸漿、バイの泡酸漿等、一個の卵囊中に十數個の卵
を藏するが故に、一個の母體より産卵する數は、千餘個を算すべく、イカ、タコの
如き高等なる動物に至りては、一個の卵囊中に一個の幼體を含み總數百餘箇に過ぎ
ず、田螺、カハナ、キセルガヒ(陸産)は幼體を母體より排出す之れを胎生と稱す。

タニシ(田螺)はタノシ、タヌシより轉化せり。全国各地に廣く分布す。オホタニ
シ(圓錐形、螺層膨れ大形)マルタニシ(螺塔低く丸形)は最も普通に産し、ナガタニ
シ、カクタニシ等六種類あり。タニシ、カハナ等の淡水産は淡水中に含む酸類の
爲め浸蝕せられ、螺頂部の數層は多く溶解せるを常とす。カラスガヒ、ドブガヒ、

シバミの類亦然り。

サハエ(榮螺)はサダエ、サダヲより轉訛し、サハエ、サハイなど書す。最も古くより食用に供せらるゝものゝ一にして、三尺の童子と雖も榮螺の名を知らざるものなからん。厚き貝殻と堅固な厝を有し加之外海に産するものは、長き刺針状の突起を具へ外敵の侵害を防禦す。榮螺の外套は黒き斑紋を有し、長き觸角の基部に眼あり、大なる足を以て岩礁を匍匐し、吻を以て海藻を食とす。性甚だ怯懦にして物影に驚く。サハエワニと云へる魚あり、榮螺の貝殻を嚙碎きて肉を嗜食すと云ふ。

さたるすむせとの岩つほ求めいてゝ

いそしきあまのけしきなるかな

トコブシ通稱流れ子と云ふ。鮑より小形、殻深く長し、水管口九個を開き、外表皮の螺脈密なり、肉柔かく鮑に比し味劣る、大隅附近に産す。其他地方に産するものは殻薄く小形にして該種の變種及び他の一種なり。

二枚貝は斧足類又は雙殼類(單殼類に對し)辨鰓類と稱し、多くは左右相稱の貝殻を有し内臓を保護す、内臓の中央稍前部には足と稱する舌状物ありて、泥土に潛入して體を移動す、足の基部前方に口あり、其左右に觸唇と稱する各二枚の或は癒合せる突起物ありて口を圍繞せり、其後方左右に各二枚の鰓あり、鰓の後方には長き二本の出入水管あり、或は短く、癒合せるもあり。鰓腔に通じ水を呼吸す、肛門は排水管内に開口す、外套膜は其外方に在りて内臓を掩ふ、外套膜は常に石灰質を分泌して貝殻を増大して生長を司る、殻の前後兩端に近く二個又は中央に一個の收殻筋(肉柱又貝柱)ありて貝殻を閉づる作用を爲す。

貝殻には堅固なるもの、薄きもの或は脆弱なるものあり、周縁の堅く癒着せるものと、前後端に間隙を有するもの及前後全く開口せるものとあり、之れを前後に開くと云ふ。殻頂の後方に靱帯を有するを普通とすれども、往々殻頂下の蝶番線上に有するものあり、前者を外靱と云ひ後者を内靱と云ふ。靱帯は弾力を有し、貝殻を開

く作用を爲し、收殻筋と相俟ちて貝殻の開閉を掌る、蝶番部には二三の主齒と側齒と有りて互に嚙合へり。間々多數の齒を有するもの、側齒を缺けるもの、全く齒を有せざるものもあり。

貝殻の内面には肉柱及び外套膜附着部の痕跡を印し、水管を出せる部分は後肉柱より前方に灣入を印す。水管長ければ灣入甚だ深く、灣入の深淺によりて水管の長短を推定し得べく且つ灣入は貝の後部なる事を知る。肉柱痕單一なるものは、該肉柱痕は稍後方に偏在するが故に、貝の前後を推定する事を得るなり。

瓣鰓綱を鰓の構造により原鰓目（蝶番に多數の鋭齒あり、貝殻内部は眞珠光澤あり直角に傾斜せる二列の鰓を有し雌雄異體）絲鰓目（貝殻は左右相稱又は一部不同、鰓の末端反曲し纖毛を以て連結す、足絲を出し他物に附着す、アカバヒ、イガヒ、アコヤガヒ等）正瓣鰓目（貝殻の構造多種多様にして左右相稱のもの不等邊のもの、前後に開けるもの等あり、双殻類の大部分を占む、鰓は縦横の脈管により結合せら

れ格子状を爲す、カキ、タヒラギ、シロミ、ハマグリ、アサリ等を含む）隔鰓目（鰓は遊離せず、殻の前後に跨れる隔膜に穴を穿ち上腔を作り、觸唇癒合し足は小なり、シヤクシガヒの一屬を含む）の四目に分類す。

イガヒ（貽貝）伊勢地方にてはイノカヒ、東京地方にては周利、漢名淡菜、東洋婦人等稱す。足絲と稱する筋肉の特化物なる纖毛を分泌して岩礁に附着す。體を移動せんとする時は新に足絲を求むる方向に分泌して舊絲を抜去り前進を爲すが故に一寸の距離を移動するも容易の事に非ず。然れども貽貝は多數群集して棲息するが故に移動する事は殆んど不可能と云ふべし。

アコヤガヒ又眞珠貝と通稱す、優良なる眞珠を分泌するが故なり、右殻前方の灣入より足絲を出し、殻頂を下にし、右殻を下面と爲し、岩礁に附着す、肉は食用とし貝殻は鈿の原料となる。

ホタテガヒは殻大きく直徑六寸内外圓形にして殻頂に耳狀突起あり、二十餘條の

放射隆起あり、左殻は暗褐色にして殆んど扁平、右殻は帶黄白色にして稍深く肉を藏す、外套膜の周縁には多數の總狀觸手と左右各三十餘箇の眼を有し、常に右殻を下にし海中を跳躍し一定の場所に靜止する事なし、三陸地方以北、北海道、樺太に分布す。生貝の儘炭火に載せ殻の開くを待ちて醤油を滴下して食せば、味特に美なりと云ふ、春季漁獲し貝柱を乾燥して輸出す、重要海産の一なり。貝殻は鍋の代用として賞用せらる。

イタヤガヒはホタテガヒより小形、直徑よりも横徑の方大なり。左殻は扁平にして反て内方に窪み、右殻は深く十數條の隆起は溝を爲し、習性ホタテガヒに同じ。全國に廣く分布し、貝殻を以て杓子に製作す、故に一名杓子貝の稱あり。

貝類中ホタテガヒ、イタヤガヒの如く跳躍するもの有らず、特に斧足類にして此の如く奇習を有するは妙なり。其跳躍の狀恰も飛行機の離陸して飛揚するに異ならず、又海中の一奇觀たるを失はず。

マカキ、最も古く分布せるものゝ一にして、石器時代既に多數に繁殖し、住民の食用とせし事は各地の貝塚に殆んど蠣殻を包含するによりて知らる、蠣の養殖は延寶年間廣島藩下草津村小林某なる者あり、始めて蠣の幼貝を發見し、養殖を企圖す、後河面某三次藩の補助を得て販路を京阪地方に求め、茲に始めて養殖蠣の基礎を確立し、年々多額の産出を見るに至り、今日の隆盛を來たせり。蠣を單に廣島蠣と通稱するに至りしも偶然には非ざるなり。

蠣は川口の肥料分多き泥砂地の潮流干満の差多き場所に棲息す。七月より十一月に至る間に産卵して受精作用を爲し、六日乃至九日間にして固着生活に移る。養殖場にありては毎年五月に簀を樹つ。受精期間を蠣の潮と云ひ、九月に附着せるを花蠣と稱し夏附きと云ひ、十一月に附着せるを秋附と云ふ、翌年秋季打落して市場に出すを二年蠣と稱す。

蠣は歪長橢圓形を爲し、左殻は深く肉を藏して他物に固着し、右殻は稍小さく扁

平にして反曲し、瓦葺状の荒き表皮を被り、暗黒色の放射線三條を有す、全國殆んど至る所に産す。北海道、大連には長大なるものを産す。

蠣は多量のグリコーゲンを含有し、滋養分に富めると消化し易きとにより一般に嗜好せらる、貝殻を焼きて灰となし、又は胡粉を製す。

イタボカキ (板甫蠣) は前種よりも殻大、且厚く、略巾着形を爲し、表面は葺瓦状の層を被り、潮流稍烈しき海底の石礫に固着す、蠣の如く分布廣からず。千葉縣以西九州の西岸を経て日本海方面の西部に産す、我縣下明石郡及び淡路都志の沿岸は饒産地にして美味なるが故に有名なり。グリコーゲンの含有量はマカキよりも多く肉稍堅く多少澁味を有するを特長とす。

イタボガキは六月より九月に至る間、母体内に在りて受精す。茲に於て鰓の外面に粘液質のものを分泌して保留せらる。最初卵は白色を呈す。之れを、ホワイト、スパットと稱し、後灰色より漸次黒色に變ず、之れをブラックスパットと稱す。此

黒色部は肝臓、アンボン(殻頂)の發育したる徴候にして、雙殻を完備し母體より排出せられ周囲の他物に固着す。此期間産卵後約三週間を要するもの、如く發育完備するに至るは約五ヶ年を要す。

貝殻は胡粉を製す。貝殻を雨露に曝し置き、蓋と身とを區別し、水車力を利用して粉末と爲し、水槽に投じ清水を注ぎて能く攪拌し、更に貯槽に移し數日間沈溺せしめたるものを、乾板ほしいたに盛り夏日炎天に乾燥せしめたるものを、搗き碎き挽臼にて細末と爲し市場に供給す、蓋の方よりは優良品を得。用途は圖案家の繪の具、人形、扇子、襖紙、漆器の下塗と爲し、胃藥(ボレイ即ち牡蠣)の外砂糖に混入し菓子の外皮を製す。蓬來豆、煎餅類のコロモ等にも用ふ。砂糖に胃藥を配合せる妙ならずや、下等品はベンキの代用、漆喰及び肥料と爲す。

シハミはハマグリと共に古く石器時代より分布し、食用に供せしもの、一なり。米國の貝類學大家ビルスブリー氏は本邦産蛸を十餘種に分類し、蛸の研究上多大の

便宜を得たれども其種名の差異を識別する事甚だ困難なり。將來研究の進むに従ひ種名を減少するに至るやも知るべからず。

アサリ^{▲▲} 最も普通に産し人の能く知る所なり。似たるものにヒメアサリ（アサリよりは小形、放射隆起密にして滑かなり）オニアサリ（アサリよりは丸形、殻厚く放射隆起荒し）あり。

土留めに榮螺の殻を用ひたる

浦の花壇の夏くさのはな

夏さけてたゝ二人すむ浦の家

小鍋に代へしほたてかひかな

葛園

（大正八、七、一、兵庫教育）

第三群 研究資料 (二)

日本産蛤貝のフォームに就て

日本に産する蛤貝には普通ハマグリと稱するものと、ゴイシハマグリ又はクチブトと稱するものとの二型あるを見る。今前者をA型とし後者をB型と假稱す。其特長は左の如し。

A型のもものは殻薄く、雙殻能く澎れ丸味を帯ぶ。殻頂前方に扁し、前端稍丸く尖り、背縁緩きカーブを爲し長く傾斜す、腹縁は大なる灣曲を爲し、後端突出す。齒丘には荒き鑿目を刻す前丘明瞭境界線を劃す。

A型中に在りても著しき丸味のもの、中庸（模式的にして最も廣く分布する型）のもの、後方に長く延びたる型の異なる型あるを認む。測定に用ひたる産地を區分す

れば左の如し。

丸型のもの 隠岐、天草(肥後)、但馬、名古屋、
 中庸のもの 琉球、柳河(筑後)、今治、西條、波止濱(伊豫)、乙島(備中)、本莊(播磨)、
 尼崎(攝津)、和歌山、桑名、前芝(三河)、東京、石巻(陸前)、津居山(但馬)
 長型のもの 平戸(肥前)、舞坂(遠江)

B型のもものは殻厚く、殻頂中央に近く存し、殻三角形を爲す。前端丸く、腹縁の灣曲緩、後端角を爲す、齒丘の鑿目稍密、腹縁中央より前方著しく厚し、前丘不明瞭、外套膜痕の灣入はA型より稍深し。測定に用ひたる産地は左の如し。

氣仙(陸前)、九十九里濱(下總)、船形(安房)、舞坂(遠江)、白崎(紀伊)、牟岐(阿波)、
 佐伯(豊後)、日向、野北(筑前)、西郷(隠岐)、境(但馬)、若狹、能登、角田(越後)

各産地により得たる標本中より大形なるもの、み摘出して測定したる主なるものは左表の如し。

A型のもの

単位ミリメートル

産地	高さ	長さ	幅	高さに対する長さの比	高さに対する幅の比
平戸	七八、五	一〇〇、〇	四九、〇	一二七	六二
今治	八五、〇	一〇七、〇	五一、五	一二六	六〇
桑名	七七、〇	九四、〇	四六、〇	一二二	六〇
同	八六、〇	一〇四、〇	四九、五	一一一	五七
舞坂	七四、〇	九〇、五	四二、〇	一二二	五六
同	六八、〇	八八、五	四〇、〇	一三〇	五九
天草	六八、〇	八三、五	四四、〇	一二三	六四
同	五一、五	六二、〇	三四、〇	一一〇	六六
隠岐	七三、五	八九、〇	四二、五	一一一	五八
同	六九、〇	八七、〇	四五、〇	一二六	六五
B型のもの					
日向	九三、〇	一二一、五	五七、五	一三〇	六二
同	八八、〇	一一八、〇	五四、〇	一三四	六一
野北	八一、〇	一〇五、〇	四七、五	一二九	五八
同	七六、〇	九六、〇	四二、五	一二六	五六

外海に面せる場所或は潮流の烈しき所にはB型を産す。舞坂の湖水に面したる方にはA型を産し、外海にはB型を産す、其他隠岐、阿波、但馬産にも其例あり。淡水産貝に在りても、内湖産と外湖産と其型を異にする事相同じ。故に余輩はB型を以て單に産地的フォームなりと斷せんと欲するなり。

備考 齒丘面の彫刻、A型は鋭けれどB型は僅かに粗糙なるも、B型の幼殻に在りては彫刻鋭く老殻に至れば稍滑かとなる。

(大正九、六、五、動雜三八一)

ウスユキミノの飛躍

□ウスユキミノ *Lima hians hirasei Pils* の飛躍を観察するに、飛躍せんとする前、

觸手を充分伸張し、圓筒狀の足を突出して、前方に物を探ぐるもの如く頻りに運動するを見る。足を收縮し、外套膜稍萎縮を呈すると同時に、貝殻を微開し、尙強く閉殻する瞬間、前方斜に曲線を爲して飛躍し、殻長の一倍二分乃至一倍半の距離に達して停止す、其飛躍の際多數紅色の總狀觸手は、長く後方に靡き頗る美觀なり。進行速度は一回の前進に約半秒を要し、約一秒時半を隔て、更に前進を始む。斯く前進を繰返して静止する時は、足を以て徐々に數回微動を爲し再び前進飛躍に移る。飛躍は多く右殻を下にす、ホタテガヒの飛躍と異なる點は、彼の蝶鉸線と直角の方向に連續飛躍を爲すに反し、此貝に在りては四十五度の方向に斷續的に飛躍するに在り。

(大正四、四、一五、動雜三一八)

イタヤガヒの飛躍

右殻能く膨れ、外觀白又は帶黃褐色で、銳角を有する放射隆起九乃至十一條、左殻殆んど直線、暗褐色で隆起八乃至十條、外套膜縁には多數の總狀觸手と各三十數個の眼を有して居る。是れ飛躍する習性に必要なる故である。肉柱能く發達し、大抵カクレガニの一種の共棲するを見る。淺海の海藻ある所に棲み、常に右殻を下とし、雙殻を早く開閉する事により、蝶鉸線と直角(即ち殻頂を後方と見る時は前方)の方向に飛躍する、其飛躍を初むる時は飛行機の離陸すると異ならず、約四十五度の角を持して前方に昇騰し、次第に海底に下降し、更に同行動を繰返すのである。試に左殻を下に伏せ置きたるに、直ぐ跳起きて原の位置に復して又飛躍を連続した、此飛躍に要する殻の開閉速度は一分時に二百四十回の割合であつた。ホタテガヒの飛躍するのも同様である、多數の貝が海中に飛躍する様は、定めて壯觀であらうと察する。

する。

長者貝と長糸掛

長者貝は翁戎の俗稱である、廣義に解釋して *Pleurotomaria*. 屬の俗稱と見る事が出来る。本屬の貝は前世界には各國に廣く分布し、多數の化石を存するのみで、全部絶滅に歸したが、千八百五十六年佛領西印度に於て現生種を發見し、次で同所及びモラツカスに於て更に二新種を發見した。

我國にては寛政年間の著書奇貝圖譜(大阪の儒者木村兼葭堂二三九五—二四六二著)に翁戎の圖がある。無名介 按にアゲマキの一種ならんとあり。翁戎の名は天保年間の著書『目八譜』によつて命名せられ、珍稀の故を以て長者貝と名づくる様

になつた。明治十年獨のヒルゲンドルフ氏は、江の島に於て購入した標本により *P. beyrichii Hilg.* なる學名を發表したので日本にも此長者貝の一種が産する事が分り、現生種は四箇所に産する事となつて、大に學界の驚異する所となり、各國の學者相競ふて翁戎を購入したから、非常の高價を示し一個數百圓に取引せらるゝ様になつた。

千八百九十九年獨のロール氏は又新種を發表した、次で千九百三年米のビルスプリー氏は更に新種を發表したので、我國に三種を産する事となり、再び學界を聳動せしめた、併し翁戎の如き數十年來の採集數相當學者間に行渡つたので、價格低廉となり、昔日の長者貝の聲價を失墜せしむる様になつた、が學術上の價値は依然として樞要の位置を占むるのである。

長者貝は、殻圓錐形で滑か、美しき斑線を有し、殻口には深き罅裂(切れ込み)と罅裂の痕蹟は罅裂帶サイナスバンドとなつて全螺層を繞つて居る、唇は圓形角質であつて極めて小

さい等が特長である。

左に長者貝の學名、産地及び我邦産の貝に就て其特長を略記する事とした。

1. *Pleurotomaria quoyana Fisch. & Berr.* 1856.
Mariegalante Is. French West Indies.
Barbados Is. West Indies.
2. *P. adansoniana Crosse. & Fisch.* 1861.
Barbados Is.
3. *P. Beyrichii Hilg.* 1877.
Fajou Is. French West Indies.
Okinose, Sagami Sea.
4. *P. rumphii Schep.* 1879.
Moluccas Is.

5. *P. salmiana Rolle*. 1899.

Okinose, Sagami Sea.

Kashiwajima, Tosa.

6. *P. hirasei Pils.* 1903.

Kashiwajima, Tosa.

3. *P. beyrichii Hilg.*

オキナエビス(目八)

殻圓錐形、高さ徑共八十六ミリ、螺層膨れ縫合は深い、罅裂帯の上方に七八條、下部に二條の荒き螺脈を有し、斜に走つて居る生長線は螺脈と交叉して處々に荒き溝を作り、帶黃紅色の班紋を有して居る。

殻口内の眞珠層は閃光を放ち、罅裂(切れ込み)稍深く、唇は小さい。(圖版第九版)

長者貝と長絲掛



Pleurotomaria (Perotrochus) beyrichii Hilg. $\frac{3}{4}$

態状の匏筒貝者長名一(八目)すびいなきお

4. *P. salmiana* Rolle.

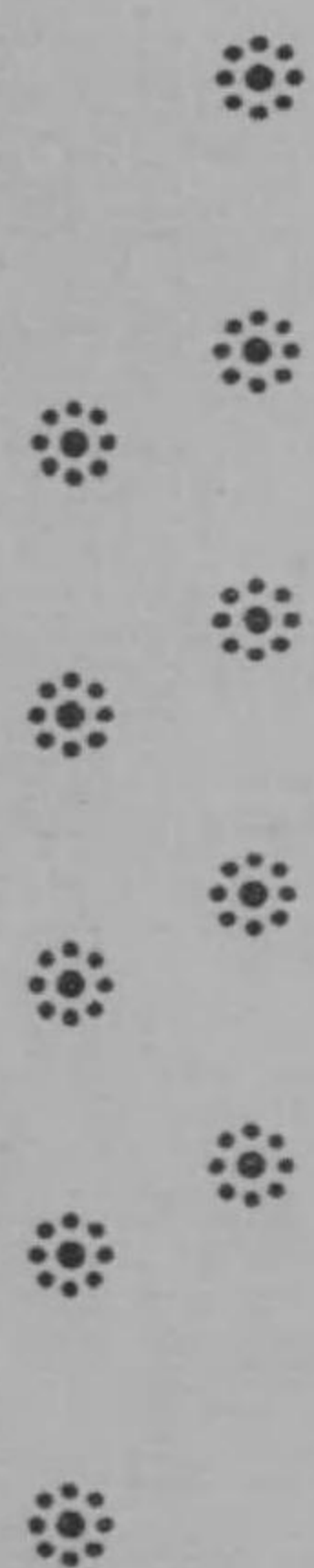
コシタカオキナエビス(平瀬)

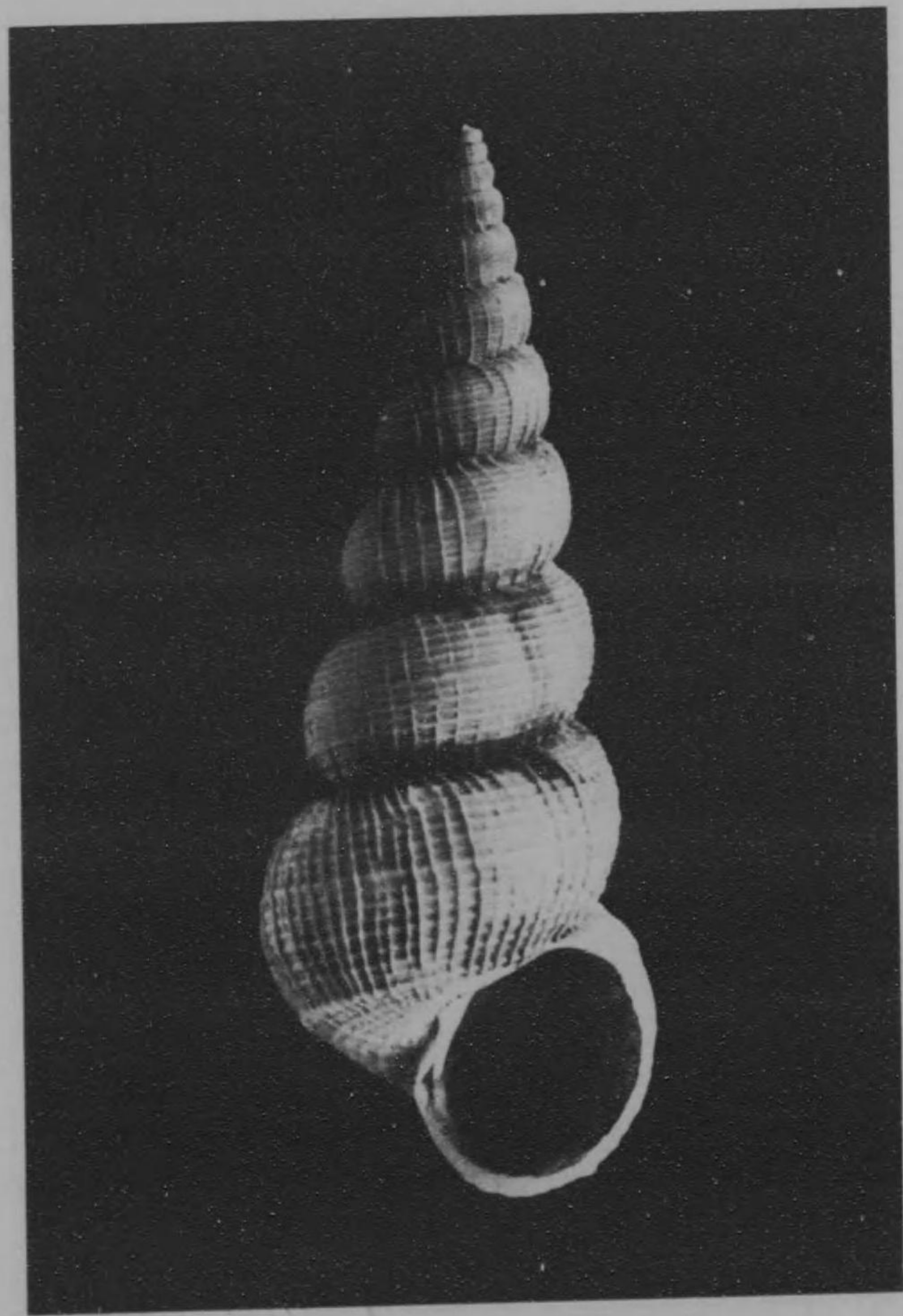
前種より螺塔高く、螺層滑かで尠しく膨れ縫合は浅い、螺脈は罅裂帯の上方に十條、下部に四條あり、斜に走れる生長線は細密であつて帶黃淡褐色の斑紋を有し罅裂稍細く貝殻は厚い。

6. *P. hirasei* Pils.

ヘニオキナエビス(平瀬)

前種より螺塔低く、徑八十七ミリに對し高さ七十八ミリである、螺層僅に膨れ縫合は浅い、螺脈細く罅裂帯上方に十條、下部に四條あり、斜に走れる生長線は密に交叉して顆粒狀を呈し深紅色の斑紋は火焰狀を成し美麗である、罅裂は著しく深い。





長者貝と長絲掛

Epitonium (Amœa) magnificentum Sowb.
(瀬平) けかさいがな

殻は紡錘状で高さ九十五ミメ、径三十六ミメ、螺層能く膨れて十四階を數へ、純白色で上部の螺層は微褐色を帯び、大小十七八條の螺助と薄板状の縦助と密に相交又して恰も撚糸を縦横に荒く捲き附けた様になつて居る、殻口は卵圓形で薄き膠質の唇を有し、唇は肉から分泌する液で紫色を呈して居る。

貝の特殊なる習性

一、附着性を有するもの、

A、固着生活を爲すもの、

イ、岩石に固着するもの、一定の期間運動して固着生活に移る、ヘビガヒ類、

牡蠣類、海菊類、キクザル類、

ロ、海松に固着するもの、牡蠣の一種カキツバタは海松に限りて固着す、

B、附着生活を爲すもの、

イ、岩石に附着するもの、海岸の岩石に附着し常に怒濤に抵抗し、間々水面下に入る事もあるが殆んど岩石上に在て陸棲貝に近き生活を爲す。ヒザラガヒ

類、カサガヒ類、タマキビ類、菊花貝類、(アハビ類)